八月部目録

△印あるハ能諸の季を持るのみ

○養生の法。○雨風の考。○米の豊凶

○妙芸の季。○季を祭。其外人家車馬のことの処々ふ数多あるゆへ目録にハ略さず

八月　卦　月支　陰陽生　異名並諸　調子　初丁

△白露節。七十二候　八三丁

△秋分中。七十二候　八三丁

日令　八月月令定つくるし干支のそなへあるむ

○衣服式　八四丁

△天中節　八四丁

朔日

△八朔　△八朔の賀　△田実の祝　△田面の祝　△田実の節　△田面の祝　八四丁

△繪行器　八五丁

△絲雀　八五丁

○御馬叡覧　八六丁

△八湖梅　八六丁

○生花式　八六丁

△三村祭　八六丁

三日

△堺天神祭　八七丁

四日

○天寿の節　八七丁

五日

△京都北野祭　八七丁

△白鬚社　八八丁

十日
△敦賀祭 八十

十一日
△司召 △定考 八十

十三日
△和泉大鳥明神祭 八九十

十四日
△豐後八幡祭 八十

十四日
△待宵 △望月 八九十 △十四夜月

△名月 △新月 △端月 △良夜 △良宵 △三五夜。

△名高月 △今宵月 △望月

△最中の月 △月見 △明月

△月こゝろ △今日の月 八十

△芋名月 △十五夜 八十

△月餅。○狗宝 △名月蟲 △名月蟲

△名月蝕 △名月

△中秋節 八十

十五日
△放生會 八十

十五日
△山城八幡祭 八十

十五日
△諸国八幡祭 △鶴岡祭 △鶴岡祭 △宇佐祭 △安の津祭

△とうろう祭 △豐前門司まつり

△箱ざる祭 八十

十五日
△駒迎 △駒ひき △きうまの弱

十五日
越野日念佛 八十

△引分の弱 △何八色門の弱 △上野の弱 △武藏の弱 △穗坂の駒 八十九

十六日
△十六夜月 △宵不出 八九十

△立待 △居待 △伏待 △更待 八十

十八日
△伊勢 栗名祭 八九十

十八日
△長崎 苦薩祭 八九十

十八日
△京都 菅太神祭 八十

十八日
△京都 御昊祭 八十

十八日
△筑前 宰府祭 八九十

十八日
△京都 西院祭 八十

月令

此部ハ八月日の定まり一ヶ月のこゝ出る

△後彼岸 八九十 △秋社日 △秋社 八九三十

△京都 死活杖祭 △死杖の祭 八十

釈奠 季秋月 八十

△礎 △椅衣 △綾巻 八十

△衣打 △衣四手打 △きぬ打 八十

△毛見 八十

△落水 八十

△下りやな 八十

△新綿 八十

時令

此部ハ八月一ヶ月の時候こゝかゝるこゝ

△暴風 △野分 八九十

△肌寒 △長き夜 △そ寒

△や〜寒 △秋ふる △そろそ 八九十

△長夜 八九十

△もろ汐 八十

草木

此部ハ八月の草木と出る此のゝ中ハ三秋ふも用ひ来る物

△初紅葉 八ノ廿八丁
△新蓋草 八ノ廿七丁
△牡丹根分 八ノ廿七丁
△木槿花 八ノ廿七丁
△縷紅 八ノ廿七丁
△金剛草 八ノ廿七丁
△花しくれ 八ノ廿七丁
△草鳥頭 八ノ廿七丁
△紫苑 八ノ廿七丁
△宇治花園 八ノ廿七丁
△薄穂 八ノ廿七丁
△狼地草 八ノ廿七丁
△紫蘇実 八ノ廿五丁
△烟草花 八ノ廿五丁
△敗荷 八ノ廿八丁
△名の木散 八ノ廿九丁
△木芙蓉 八ノ廿九丁
△挂花 八ノ廿丁
△檀特花 八ノ廿丁
△ゆりの花 八ノ廿丁
△鳥頭 八ノ廿丁
△刈萱 八ノ廿二丁
△月草 八ノ廿二丁
△滋賀花園 八ノ廿三丁
△ねぶかの薄 八ノ廿四丁
△穀精草 八ノ廿四丁
△黄蜀葵 八ノ廿五丁
△藍花 八ノ廿五丁
△そばの花 八ノ廿六丁
△芦の花 八ノ廿六丁
△項羽草 八ノ廿六丁
△龍膽 八ノ廿七丁
△玄参 八ノ廿七丁
△菓萱 八ノ廿七丁
△苦参引 八ノ廿七丁
△茶堀 八ノ廿八丁
△銀杏実 八ノ廿八丁
△通草 八ノ廿八丁
△玉瓜 八ノ廿八丁
△眉児豆 八ノ廿九丁
△木賊刈 八ノ廿七丁
△ゆう〇塩 八ノ廿七丁
△ねぶや引 八ノ廿八丁
△石榴実 八ノ廿八丁
△茴香実 八ノ廿八丁
△蔓茘支 八ノ廿八丁
△種瓢 八ノ廿八丁
△菱取 八ノ廿九丁
△茸菌 八ノ廿九丁
△鼠芽 八ノ廿九丁
△針茸 八ノ廿九丁
△松茸 八ノ廿九丁
△椹茸 八ノ廿九丁
△狗茸 八ノ廿九丁
△石茸 八ノ廿九丁
△柳茸 八ノ廿九丁
△兎目茸 八ノ廿九丁
△紅茸 八ノ廿九丁
△雀しめ 八ノ廿九丁

△革茸 △櫟茸 △猪茸
△蘇茸 △桃茸 △蛇茸 八十丁
△天狗茸 △月夜茸
○栗しけ △柿しけ 八十丁
△松露 八十二丁 △中稻 八十二丁
△粟稗引 八十二丁 △貝割菜 八十二丁
△摘菜 八十二丁 △中稜大根 八十二丁
△間引菜 八十二丁 △菜種蒔 八十二丁
△胡麻刈 八十三丁

種植

△芥子蒔 八十三丁
△大根まく 八十三丁 △豌豆まく 八十三丁

生類

この部ふい八月一ヶ月乃生るいとあり

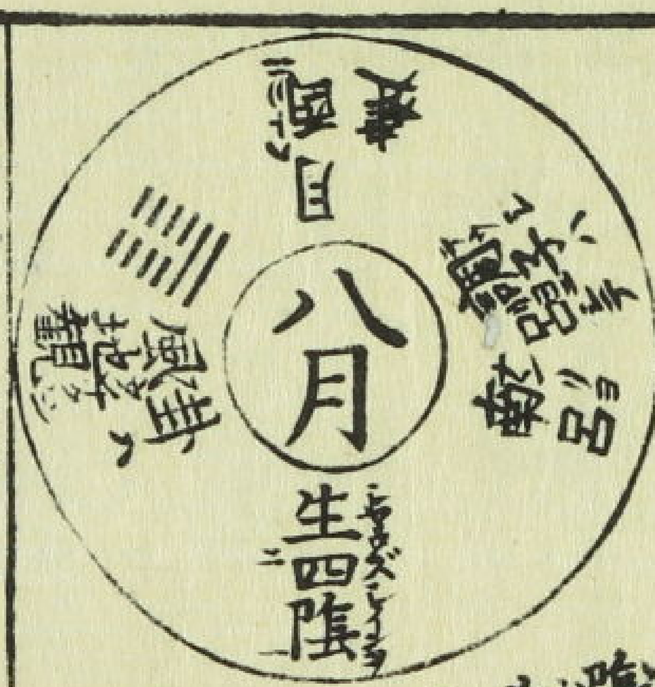
△鮠帰 八十三丁 △稲負鳥 八十四丁
△鶺鴒 △ちゝ △石たき △ちゝ △ちゝ △ちゝ △ちゝ △ちゝ
△つゝみをきる 八十四丁 △渡鳥 八十四丁
△朝鳥ちる 八十四丁 △小ちるとり 八十四丁
△色鳥 八十四丁 △鶉 八十六丁
△山雀 八十六丁 △こがら 小蔭る 八十六丁
△四十雀 八十六丁 △日雀 八十六丁
△猿子鳥 八十七丁 △貶猿子 八十七丁
△頬赤鳥 八十七丁 △ゆびろ 八十七丁
△瑠璃鳥 八十七丁 △眼白鳥 八十七丁
△鶫 八十七丁 △島鶫 八十八丁
△鵐 八十八丁 △翡翠 八十八丁
△連雀 八十八丁 △犀長鳥 絲散 八十八丁
△啄木鳥 八十九丁 △菊戴鳥 八十九丁
△掠鳥 八十九丁 △来鳳 八十九丁
△鶯子鳥 九十丁 △鶉 九十丁
△忠ゝ 九十丁 △蒿雀 九十丁
△橿鳥 九十丁 △頬鳥 九十丁

△伊須加鳥 八ノ廿丁　△初雁 八ノ廿丁
△雁 △雁音 △雁金 △くろ雁 △かり △こゝろ雁 △天つ雁
△一つらの雁 △雁のたまづさ 八ノ廿二丁　△鴇 △野雁 八ノ廿二丁
△鴻 △菱食 八ノ廿二丁　△鸕鷀 八ノ廿四丁
△鵲 △日雀 八ノ廿四丁　△鷦鷯 八ノ廿四丁
△鶺鴒 八ノ廿四丁　△鮭 八ノ廿四丁
△鯔 八ノ廿五丁　△鰹加魚 △かしらのく 八ノ廿五丁
△江鮭 八ノ廿五丁　△太刀魚 八ノ廿五丁
△落鮎 △さび鮎 八ノ廿六丁　△下梁 八ノ廿六丁
△崩梁 八ノ廿六丁　△蛇穴ニ入 八ノ廿六丁

【必用】此部ニハ風雨の占○破軍の向方○日まハりのよし悪○よそへ行の心得○作事のよし悪○料理こん立の法食物のよし悪等其外ありとあらゆむる日の定ある事ハ日の日令の部よりひ此部ニハ日の定まらざる八月中の月要用の事ばかりあつめしるを

八月之部

△印付たるハ前とより俳偕の季ニ用来る物ぞ



陰氣初て陽を犯す下上を剋あり初て起居と節ニ発治扶陽乃術を専らとすべし

○南ハ陽也呂ハ旅なり言ハ陰氣が陽氣を旅助るかたとなり前漢書律暦志ニ出

○觀ハ二陽上ニ在て下民を見て教を布く故ニあふぎ下を慈むといへり此月放生會とおこなるゝも此義によるなるべし

八月異名 △仲秋 礼記ニ出 △桂月 提要録 △桂秋 △壮月 △仲商 已上四時纂要ニ出 △南呂月 事物異名ニ出 ○素秋 △中商 △白露 △南呂 已上留青采珍其外諸書ニ出

和名 △燕去月 △雁来月 已上月令 △葉月 下学集ニ出 △さくら名づくようさく

はるさ月 秘蔵抄出 △さなえ月
△くさの月 已上莫傳抄出 △秋月
△月見月 △紅葉月 已上藏玉抄出
△長月 時ハ九月ニ定む 俳ハ八月又九月 △竹乃春

異名註

△桂月 桂の花開く時故名つく 桂秋も同

△清秋 くさの此頃空明永清き故
△仲高ハ秋乃中と云へり 夏ハ
△壮月 くさの八月辛と得ハ塞壮 出雅
△白露ハ節の名へ註節の外ハ
△南呂ハ律の名へ註ハ口の律の外有
△葉月と云ハ此頃木ハ葉色づき
落る故葉落月の略也 清輔奥儀抄出
又ハ八月の干ハ字略なるへ
又ハ八月くさの初来也ハ初て来る月故
△長月とハ夜初めて長くなると覚
ゆる故く實ハ長き冬の夜も夏
の短くなり對して長くなると知へ
也 李寄ハ八月くさ俳多し 俳ハ九月くさ
△竹の春ハ此頃暑さ去り寒さ来へ

とそろ氣にて至て涼へ故ハ唐の
俗竹の小春くいハ 贊寧筍譜出又
此月竹さかんなるゆへ名づ
くくもいへり さ花さ月のさ
ハも夢ゆへ名づ

秘蔵抄 さつき

朝ものの声ゆるうもぐき
朝乃さくれうを秀のまへ

木漆月

△

名ことゝ高くよを月
あやむあきこやはきこき

草漆月

莫傳

ふ義さにて一ハ事ハ
くさハ月くさのはる

秘蔵抄 さて花さ月

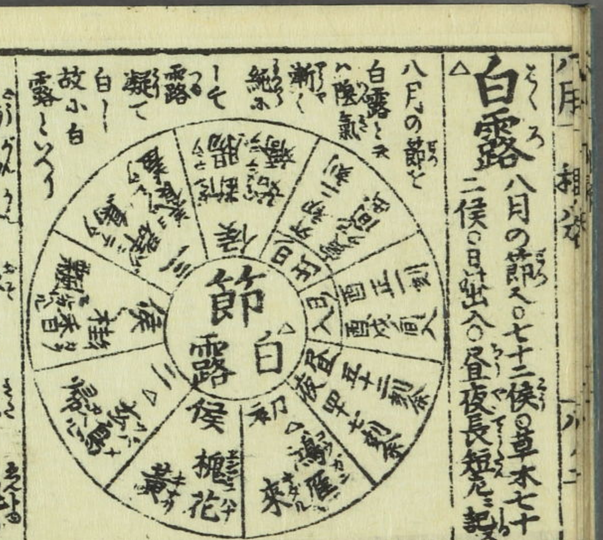
あさちが系ハ月うちうへて
あさちが系ハ愛をうる事

藏玉

紅葉月

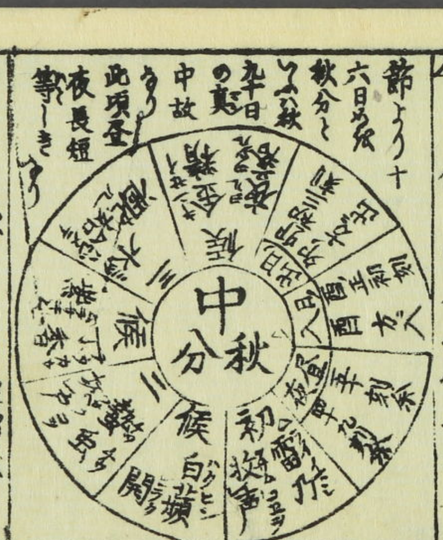
紅葉月の

△白露 八月の節入○七十二候○草木七十二候○日出入○晝夜長短を記す



日和はぎきてくらしあるべし
火は属をつかりておこす
雨ふれば實いうもくるし
風はうるさくひわるふかり

△秋分 八月の中○七十二候○草木七十二候○日出入○晝夜の長短を記す

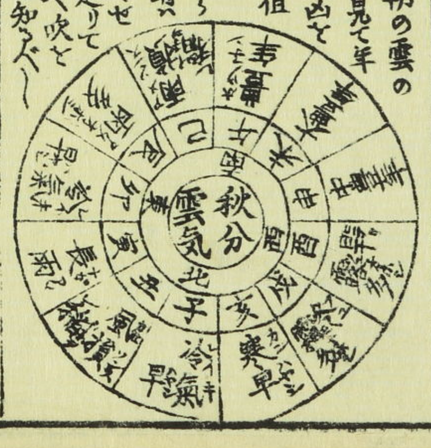


此月〜に來二月まて雷声を收めて鳴らす○蘋は浮草なり
○蟄虫は戸を閉て冬の寒氣をふせぎ土にて穴をふさぐ
○丁香紫は花の咲とき
○水は是をとると漸く涸るなり

○金精といふる星夜の中に酉海ふかくるまり落るいかくそえ

秋分 **天氣占候** 今日晴天多れい稲作よろしく曇るいあしく夕立よるれいうつ然も冬にありて米の價貴き事もあり○西方ふ白雲有黑雲ハ来とい秋の收まよろしく年旱まり○秋分の節社日の前よあれい来年米豊え

今朝の雲の行と見て年の豊凶を考る但行方定まらざる時ハ證しせぞ定りて一方へ吹と見て知べし



秋分 **禁忌** 殺生をなる事なれ刑と行ふこなれ喪を訪ひあひい病人を尋訪ふ事なれ○大酒を飲むこ

祭祀 今日先祖と祭へ秋分ーみぐりれ他行をるこなまと

日令 八月日の定まりたるこ此部なり支の定まりたるこ二月春分の祭同

朔日 ○いにの月まも朝日のひよまくくれい其月中の日和大抵ようくも今日少ー雨あれい此月中風雨順まりといふ○晴天なれい稲ふらー然まくくも冬まて旱ばけそ麥野菜にあし○又大ふ風雨あれい麻あしくして布の價來年貴ー大豆小豆にもくくふーかまくいふ

朔日 **衣服の式** 今日武家万民くもに紫氣

〻うつくも帷子と着麻上下とて
き礼と勤むべし〻ほうこう上下は略儀〻
○小笠原家秘合進退集に曰五月
五日より八月晦日までは帷子を
八月の内ふ若寒さ時は袷とも
小袖とそもかくさびゝれ下り
かさ○あらゝ紙はくとて
きれをゝしゝ刑

朔日

△天中節　此日は凶悪の日と故に昔は陰陽家
より天中札と称して貴
賤の門戸に貼をゝく世俗同答出
れは陰陽一家の説なり
○五月五日の午の刻を天中
節といふ五月五日の異名
ともなれり　撮要録に出さう

朔日

△八朔　△八朔の賀△田實の節
△田の實に祝△田面の祝
△憑祝○特牛節句
○此日たのもれいとも

儀式〻もいひて家々たがひふ物
と贈りあふ事あり○公事根源
ふい此事本説なゝ世俗の風儀
也とあり後深草院の建長の
頃より始りそもゝあい田のうち
米と折敷土器をゝに入きて人
のもとへはこりけるとかやと也
るべし○日次記事ふい此祝ひ昔
はなりと事なり中世にはりて
農民稲の初穂と今日禁中へ
奉りし事より起りとあり
○一説ふ田の実田の面をゝかく
字と頼むとて字ふ通りて人きた
がいふたのもちゐるむ心なる物とれり
あゝ事なりとゝ
家万民ゝいと厚く祝ひ喜とゝ
○唐土にも今日勝とす月令蠙
勝ゝい新穀を祈る祭の名其外
説多委ゝく日本歳時記出べし
俳　八朔や丟ゝ素ふ嘉ゝ踊の子　東

(狂)今朝これ稲穂を取て家の棟にさしたるは文竹
れのもたのむ前句なるべし

朔日 △繪行器 木地にて行器のかたちと造りて目
出度繪をかきたる田の實
又は菓豆のたぐひさまざまの物を
作りて互に相たのむの意ふ
混じて今日わくるなり京師
は今もとてあつらへ八朔前
日ふれ市中に繪行器を賣り
あるくも也真粉糕ふ角小豆を
ぜらるゝ粽てこれを藤乃
葉にて御所言葉にいへり
是とも色がひを入て贈り合て
(俳)絵形思やと上ふ封箱の紙屋
賣ものしく絵けを思いかる歟文除鬼

朔日 △綵雀 ○造雉 ○造松虫
○造鷺 右の品ども
銘々わりしくに作て繪
がひをそへて児女同士なく
マあり又意故仁と枝をかり
こうしてもわくるこうしたり
(俳)かしとる綵雀の細工人 曹文
芳仁い巻に上の為絵うる紹羅

朔日 △御馬奮覽 今日東都
二疋を献ずる
馬士兼付の竹を
ひ来る古十五日駒迎の例なり

朔日 京 ○松尾神事相撲 東西ふ
分つ公京方 嵯峨方と云
往古い内裏相撲節會の通に
て行ふ所なり ○八幡うらいその
式社傳あり ○神泉苑善女龍王祭

朔日 △八朔梅 是早梅の類なり
堂上方の賀儀よ
も取用ひらるゝ事も有とぞ
(俳)紅波はや稚子の秋の梅宗曽
八朔や長堀ふ新宅と梅の花 超波
棟嵯や竹の表ろこの日新蕎

朔日　**妙術**　今日百卿の露と取りて紅結ふ

○眼明膏

ぢくと眼をあらへば目明ふなる
○又方　柏の露と取て洗ひても上し
○七月晦日東ふ向ふの樹の枝をきりて炭ふやき今日其炭ふて赤口白舌隨節滅しかくて門ま押せば火難盗難病難口舌等乃わるくもいろうるべきなり

朔日　**生花式**　○秋海棠○萩○桔梗○秋菊○今日生之

朔日　**和泉三村祭**　堺申斐町の東ふあり開口明神

と云延喜式出當地昔の名ハ開口村本戸村原村の間ハ故ふ三ツの村明神と云なり又大寺とくとなるゆへ俗ふ大寺祭りと也

○なり　住吉明神乃外宮と称して祭りハ朔日二日兩日なり

二日　不成就日　○今日白髮を拔ふし
○交易又衣服を裁ふむ

三日　風雨あれハ麻宜しく布の價高し○晴天あれハ冬早し

米ふとし○今日日月影曇りてあざやふ見えざれハ一月雨多し
○今日ハ竈の神の生日ハ祭ハ十二月あれも今日竈を清くまハ福あり

三日　**和泉堺天神祭**　戎町東ふあり威德山常樂寺

と号を昔ハ塩穴村ふあり故ふ塩穴天神とも云六月十三日と夏神樂と今日と秋祭と云神輿ゑびを島へ渡御あるなり○毎月廿五日ハ連歌興行あり

俳　戎ゑびすふ社の楊うゑ　李坡

四日　○今日將碁とさして勝る者ハ年の終まで福あり負る者ハ病ふかゝる故ふ今日を圍棋占福乃日といへり

四日 天壽の節 唐ふてい今日を天壽の節といふ

四日 京北野へ都祭 ○祭神三座中ハ菅丞相なり昔ハ祭五日なりしと永承元年より八月四日ふ定りさり 拾芥抄出

此祭甚美麗かして神輿下立賣の西御旅處へ渡御ありしと社記ふ見へたれども今ハなし

○按ずるに應仁の頃より此祭退轉して今い漸く氏子町より芋莖以て神輿と作り渡御のまねびとなすなりとぞ

日うり是を俗ふ芋莖祭といふ 九月四

哥 年中行司哥合 藍堅

たのむるもちろんなれども

少輔の雪はけぬるさめぐ

俳 さくめるを紅日和と小のお武の移水

狂 いすゝ(ふうこんの)る場と安されと

さそ安へさそ安ふまりろ 物流

五日 千秋節 今日唐玄宗帝降誕の日ハ故ふ名く後改て天長節といふ今日王公ハ鑑を献じ士庶人ハ承露囊と云りのと相れる 隋唐嘉話 或ハ揚方里ノ揮麈録ニ出

○今日交易衣裁を忌むなり

五日 江迚白髭社開帳 昔ハ今日開帳あり

元禄の頃なり絶えなんとす

俳 戸を寄て神の名ハ杖の毛 簾隅

七日 南都 ○道祖神祭 ○さい祭 猿田彦命 今御門町ニ社あり

八日 今日ハ竹醉日といふ能くげる李ハ五月ハ 五月十八丁メ

十日 不成就日 今日小児の額ふ朱して点とすべし疱瘡麻疹とかるゝ諸病をのぞくなり

十日 和泉 ○上石津祭 神休蛭子の神ハ ○下石津社有 此祭ハ正月十日なり

十日 前越敦賀祭 敦賀の古名角鹿なり○祭神仲哀天皇なり氣比社にて神事二日より今日までなる

ゆゑ賑ひしく京師祇園に似たる山かぐら等いろく有り

十一日 ○来年は旱歟水なくて古なる今日朝早く起て水辺に至り風波なき処の水と一處うちかくして其水を見て知る之其水ひくやうなるは来年水多きなり

うり水溢るゝやうなるは来年旱なり

十一日 ○秋の除目○京官除目 定考 名目少し出

諸官人王臣國司に至まで才徳の勝れる由を奏して品々の爵禄を賜ふ日なり春の縣召ふおほゝ二月なる人柄を為むと

列見といひそれと昔のつめて

奏をなを擬階の奏といひ

此人々を多くひ出して爵禄を賜ふと定考といふなり

(哥) 拾遺 貫之

つくつくふ世をふるものとなる物の

れも我をや友しそなるらん

(能) 定考や奏と貝合あすを祝戸草屋

(狂) 仮も同道らめ名の乃司に

ゆ茶のそ尾の宮まつく 越前

十三日 和泉 ○大鳥明神祭○社は大鳥村に泉あり和泉の一宮祭は年に一度

十四日 待宵 小望月 毎月十五日望月と

称するゆへ今日を小望月と云

○十四日を待宵といふ事中頃の

俳諧にひ出しうの和歌連歌

もて待宵とも むくはこるゝ

哥に待宵くるゝ人を待ひ

のほゝ云心そなるまも恋の歌

(哥) 十四夜月といふの題を

よまもくるゝ 道香卿

あす秋入る青の月はつるおさえ
明日の宮中の新を祝ふ

連 明日の名月もあそぶ宗祇
月今宵見るも明日の光々宗牧
月なむ見ぬ人そある古今 昌叱

俳 白雲や島のいびきの涼り 芭蕉
白雲やすつぽんの月の物淋し 菊乙
月つ青ぬまくいたげき月入れば 蓮二

狂 あすからとそくいんけるあさとも
おうとうとあけるまつ白雲 左史

詩 十四夜五字對句 同上

天意將圓夜 只爭一夕早
入心待滿時 恰作九分圓

詩 十四夜七字對句 詩題

今夕試見先與約 未望夜
來宵定賞莫相違 鏡父圓

詩 十四夜月詞 白居易

光彩遍空輪欲滿 光三ちくテ形
モ滿ントス凡也

詩 仝 白雲

二七秋容月色奇 獨擎吟筆
飲芳巵 二七十四夜ノ月面白クヒトリ詩ヲ作ラント筆ヲ取又酒ヲ飲

十四日 豊後 ○八幡祭 府内ふるう今日放生會行る魚を海中へ放

事繁く〜又演そて市とかつる
甚賑り是て府内演の市と云

十五日 今夕月曇れい方の事 ゆし
今日雨ふれい来年正月元日の
天氣く〜又来年水多〜○月曇
きい蝉脚む事る〜又蕎麥ま
実る〜○月あたらうれい鬼
多く魚とくる〜

十五日 中秋節 秋九十月ゆえ名づく又八月九十月最中

月の異名〻〻〻〻〻。唐にも今宵と中秋の夜〻いひて月を賞する事李唐の世より盛〻して詩人文人詠多し野槌に出

十五日

名月

△良夜△良宵△端正月△三五夜樂天等詩△新月△名高月△今宵月△望月△最中月△月見

△月こよひ△今日月△明月△芋名月故事に出△十五夜

○日本十五夜の月を賞するこゝハ孝元天皇の御時より初るこ舊本長明四季物語に出より又今宵の月をゝ〻〻〻〻〻読る哥ハ天暦の御製なり月の名の○漢にて唐の玄宗貴妃〻〻大液池のぞ〻て月を翫ひなぐさ〻事又羅公遠ハ此夜玄宗に侍て月を翫ひそる事開元遺事逸史等に見より次に故事説多し委

〻〻日本歳時記に出

○望月ハ満月なり〻三ムメモ相通じて三〻モ〻同音なれハ又月の出る時入日〻向ひ望むゆへ望月〻〻〻毎月月と日〻相のぞ〻て月〻ちゆへ連誹ハ今日の○端正月〻〻端〻〻〻正圓月なり斯〻〻事文類聚に出

○新月誹諧の季に三秋に入る〻〻る昏もあり○詩哥の説ハ違へり委〻三秋の部十二丁目

名月故事

霓裳羽衣曲

羅公遠ト云フ者十五夜玄宗ノカタハラニ在テ月ヲ翫フ杖ヲ取テ空ニ投ケレハ化シテ橋トナル其色銀ノゴトシ帝ト共ニ此橋ヲ登リ終ニ月宮ニ至ル仙女數百人アリテ歌舞ス帝問コレ何ノ曲

ナルヤ答ヘテ云ク霓裳羽衣ノ曲ナリ 玄宗コレヲヒソカニシルレ又橋ヲクダルニ歩ニ隨ヒテ橋ハ次第ニ滅シケリ

其後伶人ドモヲ召シテコノ曲ヲ制製ス事文類聚ニ出

月餅 十五日唐土蕪都ノ人サヽくノ餅ヲ作リ名ト形ヲ思ヒくニ好ミテ人ニ送ルフナリ是ヲ看月會ト云 廣義ニ出

○又麪粉ニテ作リヤキテ大中小段々ニタヽミカサネテ上ニ五色ノ名リヲ置キ桂ノ花ヲサシハサミテ月ニ供ストイヘリ 醉水談筠ニ出タリ

○本朝ノ團粢モコレニナラヒタルモノカ芋ヲ食フハ諸國ニ普子ケレトモ東都ノ俗ハコノ日給ヲ食フナリ

狗寶 狗中秋ノ月ヲ望テ戲寶ヲ吐クフ團ノゴトシ即チ其寶ヲモテアソビ復コレヲ飲ナリ 農夫コレヲ知リテ月下ニ光リアルトコロヲウカヾヒテコレヲ取ルトイヘリ

㊂ 續古今 天暦の御製

月ゝこそ見るとの月乃
ゆくへ月ふ似る月そなれき

詞花 駒引ヨリ会て 藤朝信朝臣

引駒の新とをゝへて天の坂の
せゝ後ゝそ月ハ出ける

拾遺愚草 定家

明ハ又秋のまいもをぬ色〳〵
かゝゝ月の新きのゝゝ

金葉集 仲正

めつらしく来る秋の半ゝ
月のゝこゝ見るゝ青ゝ

仝 公實

秋の新ゝをおほるゝ
ゝゝひの月乃光ゝそ

月もろ人いく夕ゝい今青八世
かゝてまつらん一世のまろ紙

詞　そろもろ月こゝろ月ぞこゝろ月ぞこゝろ月。
名は月名は月名は月。名は月名は月。
ろろ秋の月ぞこゝろ月ぞこゝろ月ぞこゝろ秋。こよ
ひ名月ぞこゝろ月のこゝ。の秋こゝ。秋の
月ぞこゝろ月ぞこゝろ月ぞこゝろ月ぞこゝろ月
○秋さは月い四季戀朝ようてて
ろろ月ぞこゝろ月ぞこゝろ月ぞこゝろ月ぞこゝろ月
賞翫の人紙ゝむゝ弱むゝ旅
世食ゝ食ゝ　食ゝ　食ゝ

連　人ゝて月ゝ秋のこゝろ月ぞ　宗祇

表い表秋い月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ　宗祇
月い秋の月秋の一表乃月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ　昌吟
月ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

俳　を行く人ゝ休ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ　芭蕉
月月や池とめうてゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ　今
月月や月の上ゝ月の月月月月月月月月月月月月月月　其角
月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ　野水

月の磯月海ゝゝ波ゝゝ波ゝ
月月や平ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ　蓮
雲の月月月月月月月月月月月月月月月月月月月月月月
月月月月月月月月月月月月月月月月月月月月月月月月
名月月月月月月月月月月月月月月月月月月月月月月月
月月月月月月月月月月月月月月月月月月月月月月月月

狂　女ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ　貞室
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
月月月月月月月月月月月月月月月月月月月月月月月月
月月月月月月月月月月月月月月月月月月月月月月月月

名月

八月ふ閑のあり
ゝゝ乃十五夜ゝ

連　今月ふあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　宗養

俳　ゝゝ月ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　来山

名月蝕

哥　いむゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

俳　いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　西行

△名月暈（うん）　○月の暈　其外名月の事博物筌の
ソの部ニ季〻ニ出ル

（俳）傘（かさ）にて面（おもて）磨（とぎ）れり今の月　只雄

（狂）天下今月と二つの傘　懐誉
等かゝるこの月　雲天

△名月曇（くもり）　西鶴（さいかく）

（哥）家集　藤原肅

うしとこそ世にはなれぬ今宵も
なほいのかゝる月のくもりに

（俳）弘古の昔もくもく月と愛花
沈る夢と月見の和歌は赤面

（狂）変わるこそ〻白雲は月の
かゝる月見の秋こそ〻ものや　素丸

△名月雨（あめ）

（哥）御集

おく〻かゝる雨もるさけい
ありあけの月　後水尾院

（俳）月と雨面白ものは雲の立間
面白ありてまぬの中の月見る淡雪

（狂）月新よりあて今宵は雨
ふりかゝりたる面の傘　近友

（詩）名月五字對句　同上

天上十分月　一年光正満
（テンジヤウジユウブンノツキ　チヨウニカリサニミツ）
（ソラニハ十分ニミチタルカゲ　月ノ光リサヤカナル冬中ノ）

人間一半秋　萬里氣尤清
（ニンゲンイツハンノアキ　バンリキモツトモキヨシ）
（セカイデハ秋ノ半ニテカヽ　ヨホウニテスミワタル）

（詩）名月七字對句　詩礎

不知千古中秋月　九秋半
（ズシラセンコチウシウノツキ　キウシウノナカバ）
（秋ノ中日ノ半ニ中）

老却幾番浮壯人　萬里圓
（ラウキヤクスイクバンフセイノヒト　バンリマトカナリ）
（万里ノ外デ丸イ）

○此句ハ哥ニ大カタハ月ヲモメデシ
コレゾコノツモレハ人ノ老トナルモノ
トヨミタルト同ジ心ニテ昔カラ
此中秋ノ月ヲ賞美スル人ヲ
イク度カ年ヨラセタコトカ
知ラヌト云フコトロナリ

（詩）中秋之句　秡華
（チウシウノクバツスイ）

詩　一年逢好夜萬里見月時　張佑

一年ノ中テ面白ヒ夜ニ逢テ萬里ノ外ニテ月見ヲスル時ハ今宵ジヤ

詩　三秋端正月今夜出東溟　韓愈

タヾシクマンマルイ月ガ東ノハテノ海ヨリ出ブルナリ

詩　高秋渾似水萬里正圓明　靈原夫人

秋フカクナレバ山モ川モスベテ水ノスミワタリタルヤウナケシキデ萬里ノアナタ〻デ月ガ一メンニアキラカニテ〻トカナルヨシナリ

詩　三五夜中新月色　白樂天

十五夜ノ月ガコラタニサヤカナヤウニミエル

詩　名月之詞　唐僧廉白

尋常三五夜豈是不婵娟

十五ヤノ月モアザヤカニウルハシクナイデハナケレト八月十五夜ノ月ハカクベクナモノジヤトナリ

及至中秋半還勝別夜圓　月八

月ノ十五夜ノレバ〻タ外ノ夜ノ〻トカナルニハ〻サルモノニヤ

清光凝有露皓色爽無煙　光リ

カッツテ露ノヤウニ見ユル皓キイロサハヤカニケムリホドノクモリモナイ

自古人皆望年來復一年

ムカシヨリ人ミナ今ヨイヲ賞シテ一トセニ一夜ノ良夜トスルナリ

詩　名月之詞　唐　王建

中庭地白樹棲鴉　冷露無聲

濕桂花　庭ニハ月ノカゲ白ク木ニハノカツラノハナニコリ露ハ月中ウルオヒヲ生スルケシキナリ

月明人尽望不知秋思在誰家

今ヨイノ月ハ世上ノ人皆見テ賞スルニ方其中ニ実ニコノ秋ノ情ヲヨクシリタル人ハ何クノ家ニアランヨクシラクハ我ヒトリテアロフ

狀　月見之文　大藏漢文ナリ

良夜之清光萬里同
賞如公得閑請共遊
廣池行厨按排已具
爲速許駕

尺牘　昏替并ニ王解

良夜　仲秋○此夜　晴光　名光○
潔　萬里　万郷○万國　同賞　上
稱歎　中　縱目　行厨　上　淺酌
中　麁饌○淡飯　按排　上　設不
勞公　中　悉余相計　許駕　上　仰
望伏侍　中　棍許然諾

狀　名月文返事
承命一輪之明輝玉賞詠記
得高筵會詩客開地吟行尤
一大勝事應招趨拜以謝

尺牘　上中下昏替ヲ記ス

承命　上　辱答　中　指示　一輪
明耀　万里素影○秋月佳名　賞
詠　絕比倫○勝幽賞○何如　記
得高筵　上　開讌瓊席張雜
宴　中　群友呼來爲宴會　開
池吟行　池上遊讌　一大勝事
○詩人情物○興趣○逸興
應招　上　一諾應命　趨拜

(上)疾至不辞　(中)來謂　(中)不

サウソクヰンキトニイルベシ。○ヒイツテオメニ　○サツソ

超時　(中)倒履走謝

クナシ上　○ヒリヘスイルベシ

十五日　放生會

皇の御宇養老四年に征夷の事ありて日向大隅大ゐ乱

禁庭より宇佐八幡宮へ御祈誓ありて敵を亡ぼん

其後八幡の託宣ありて此度の軍に人多く死せり放生會とおすべきよし神勅あり

しよう国々に初る文字鎌倉記等に出

其外説多し委しくは神佛祭礼記に出すなりあらはしこゝに

(哥)年中行司　為秀

業ふかくとはるるなもたくなん

いかるとは放つ神の恵みに

新撰六帖　知家

男山放の名あり　川流れたるあり　(俳)祝は奉る者は足利義政　放生會の日為焉帽子無道

放生會後の約束　祝　仏名林

龍を引て出るなり　(狂)石清水八幡宮にあつて殺の肌

つりと放つ国のきゝゐく　近友

十五日　山城八幡祭

當月八幡祭り　放生會は諸國

ふ多くあり次に記す山城國雄山

八幡宮に行ゐる事は勅會にて

公卿殿上人御參向あつて甚

嚴重なる御神事あり放生

會祇園會土塔會を本朝

三大會と昔は申せしを今

は放生會のみ勅使御參あり

て祇園會は其式のごとし土塔

會は無さゝ放生會は

今曉寅刻神輿御下山あり

中頃兵乱ふようして退轉ありしゝ
延宝七年御再興あり〻〻

十五日 諸國八幡祭 ○京都にて
○御所○若宮
○等持院○廣沢○大〻三枝○山
崎○門出○大坂ふてハ○三ツ八
幡祭 隔年丑卯巳未酉亥○江戸にハ深草 但
上同 ○渋谷 上同 西くぼ 武州 ○志賀八幡祭 近江国 ○鶴岡祭 相州鎌倉
○粟田祭 河内国 八月十日の神事あり十四日寅の刻ゟ〻〻奥院へ渡御ありて
○宇佐祭 豊前の国へ八月十五日祭礼の事當社ハ貞観年造営ありしと
○安濃津祭 伊勢国へ昔ハ社へ寛永九年造営ありしと
○豊浦祭 長門国豊浦郡ふのり祭ハ九月十五日へ昔ハ八月ふあり〻〻
○箱崎祭 筑前国へ 豊前門司祭 大祭へ其外後博物田
十五日 播磨野呂念佛 孝謙天皇の御宇敬
信〻云僧加古川ゟ庵〻て念
佛を常ふ旅人の荷を負ひ

ゟ〻て弟子と〻〻自観八年八
月十五日盗賊の〻〻ふ首を切ら
る其庵の跡へ寺を建て教信寺と
号す今日僧徒集うて佛事とゝ寺

十六日 駒迎 ○駒牽 ○引分の使
○上野駒 ○武蔵駒 ○望月の駒へ〻ろ原の駒
○穂坂駒 ○昔ハ諸國の牧〻ろ
牧〻ハ馬を養ひ野の事 禁中へ馬を奉る今
日信濃勅旨の牧〻ろ六十疋
逢坂山ゟて引来る此右馬寮
左馬寮の官人請取て禁庭
へ奉る〻〻天皇南殿へ出御
〻〻て御馬を御覧〻〻公卿
已下次第に御馬を給ハる尚
又次將とりて院の御所東宮
へもまゐらせる此勅使と
分の使〻〻〻〻元ハ十五日ふ有
ゟ〻〻朱雀院の御國忌
當るゆへ十六日ふ〻〻たり 江家次第

哥 續後撰

おもへば坂の関の実こそ秋のもち月の弱
今宵を秋のもち月の弱

拾遺 きり系の弱 馬達

おもへば坂の関の岩角こそ[illegible]の弱
ふるさとの弱

詞 いくきの弱〈引きみれば弱〉宮人の出てむかふる〈むかふるゆへ出て迎ふるゆへ〉あふ
ちの弱〇実のもち弱〇山の端
ふる〇お坂の松ふかふ弱〇よろ
むかふる〇引きみれば弱〇松ふくや
〇ふくふかふる〇新んゆふ〇立出
る〇引きたどらぬ〇むかふる弱
〇かけも名ふて

俳 弱雲や庭てたれ見て[illegible]〈李一〉
弱ひよや伊勢の新[illegible]〈其路〉
宮ゆ出て富士を初の弱迄〈宗因〉
弱迄〈月見て公家の名ふ弱〉李波

狂 逢坂の実の岩角ぐ角たて
腰やひらんもち月きの弱 自徳

十六日 十六夜月 〈月不知〇俳諧ハ今月の季〉〈哥〉

おい説多〇三秋の十三丁月ふ出と

詞 さやけさ〇きのふの月〇あふ光り
そふ〇つきよひの月〇山の端
ふいさ〇ふ新〇去てしいさよふ〇
きのふ〇もれ〇ぬ新

俳 つきよひもまくる林の影 芭蕉
月六新やら〇撮の海老数まう 松雨
つきよひや良てみは〇風ふ揚 関山
つきよひや生の名ふ〇木奴
月六新八月の松ぐれ初める 正秀

狂 酒若て句を〇月ふ名ふ
いさよひ〇ふ〇ふ〇ふ〇ふ〇 烏兆
せう〇おいてよ〇名つけん
いさよひ〇ふ〇ふ〇ふ〇 自徳

〈立待〉〈居待〉〈伏待〉〈更待〉
右八月の季ふ出る月もあり
又三秋よりつるといふ季の月も
あり委〇く三秋の十三丁ふ出と

十六日 京都 菅太神祭 菅家御所の旧趾也西洞院五条坊門の南ゝ在菅神降誕の地ゝ紅梅殿ハ是ゝ むかひて五条坊門の北ゝあり 猶今繰ゝ小社と称して其跡のこり 神輿渡御のゝ剣鉾五本ゝゝる (能)菅原の伝の歌の歌ゝ 李坂

十七日 ○仍圓月 今夕の月を名ぎくゝあり 杜詩ゝ出ゝ

伊○三嶋神事 當社神祭年分豆 七十五度の内今日其一ゝ

十八日 不成就日 ○龍王會日 今日四海の竜王會ゝる日ゝ

十八日 京都 御霊祭 上の御霊ハ京極通筋違橋のゝゝ下の御霊ハ京極通大炊御門北東ゝあり 上の御霊同神ハ

○御霊ゝ崇道天皇、伊豫親王藤原夫人、橘逸勢、文屋宮田麿、藤原廣嗣、吉備公火雷神、以上八所ゝ近来勅して元文帝をまつりいたてまつるゝ

○仲の御霊ハ上の御霊の御旅所

○桂の御霊祭 今日相撲ゝ

十八日 南 ○西大寺光明會 今日ゝ

都 廿四日迄八幡太郎義家宮

十八日 伊勢 菜名祭 春日大明神を祭るゝ 前日社の前通南北ゝ大車一輌ゝ夜小入 挑灯 当日車を南北へひきまゝ 歌樂ゝ

十九日 今日白髪ゝ抜くゝハ ○交易又ハ衣服を裁ゝ

廿日 ○女房天神芝原祭 河内原西圓山村ニ在

廿一日 南都 ○韓國祭 社ハ高間町の南韓國ゝ韓神の社

九二日 今日沐浴し枸杞湯を

都京 ○太秦聖德太子會式

九二日 長嵜菩薩祭 唐の舟玉神あり姥媽神といふ長崎は唐人の寺四ヶ寺あり此寺々にて今日菩薩祭あり僧徒唐饗束して修行と唐人桑詣して黑き棒をつくつてたゞるこれを菩薩踊りといふなり

九四日 都京 ○太瓜明神祭 吉田山にあり神輿一基あり

九四日 江戸 ○亀戸天神祭 隔年に行ふ子寅辰午申戌あり寛永三年太宰府より勸請し奉る○六月九四日夏越の祓淺草川にて修行と

九四日 筑前宰府祭 祭神は天神へ菅公へ延喜元年筑前太宰府に左遷し同三年薨ず御歳五十九才委しく博物筌に出る

九五日 ○今日枸杞にて湯浴して藥を煉てより又は丸藥等をもつらねて功能おはし ○今日白髮とめりいみざること

九六日 南極老人星の降る日あり祈禱善事を修ことよし

南極星は人の壽命を司る星なり今日を壽星現るゝ

九六日 都京 ○崇德院御忌 崇德天皇の御事なり今日京安井で行ふ

九七日 ○佛會 此日諸佛菩薩東海にあらはる故に名づく

和泉 ○蟻通明神祭 中通荘長瀧村に在開化天皇御宇より祭始る

九八日 不成就日 都京西院祭 産土神は春日の社を祭

まつる神輿二基一基は住吉明神〻〻を同村に住吉社を祭まつる

九日　今日は萬物陰氣に感ず夜分香をたゝし○今日水陸とも
に不吉の日なり遠方の旅行
又は舟に乘る事を忌むべし

月令

此部は八月日の定まらぬ一ケ月の事を出す

彼岸　當月の節より十五日
迄を二月とす　後の彼岸なり
又は秋季と結ひて秋のひがんとも
(能)彼岸ひがき彼岸なるべし　蓮二

○京東山　真山念佛おどり
又空也堂にもあるなり

○大坂天王寺春の彼岸と
同じく敎誡人あり

秋社日　秋社といふ秋分前
後に有る戊の日を社日と
汁は春と二月の處小麥は記を
○秋社日雨ふれば來年豊年なり

京都死活杖祭　○死杖の祭なり
○褐速の社なり

三條猪の熊に在古は刑部省ノ
此辺にあり刑死人の為に社を立
祭るなり中世は千本引接寺
並に壬生地藏に春にも念佛
會ありこれをみな死刑人
の追善なりしなり

釋奠　上丁日なれども二月は
(哥)　二月　　妙覺寺内大臣

唐人のむり山の新とうつり来て
あふけいるしの秋の月

碪　〈搗衣〉〈綴巻〉○きぬとも
〈衣板〉〈衣板〉といふ　畧語なり

東雅に和名抄に引て碪はキヌ
イタ搗衣石なり字又砧に作る
搗衣杵はきぬうちキヌイタの衣
板なり　即今云キヌタなり見
そうり今は木盤と用覺とも昔
は石砧なりし故字も石偏に書
女工の具の專用なる物にて上つ
くの緣邊にも砧とも支なり

東宮舊事ふ曰太子納妃有石砧一枚〔〕あるう澄拠うう今の木
ふて製そる持盤ハ後世木綿を
專着用そるふ至て石と木ふハ
るるに今京師の深坂ふ用ゆる石
盤にて綸子紗綾紬等ふつやと付ふ用へ

衣打

〈衣四手打〈出ころ打
何〔〕も衣打栢子うり
こそ打〔〕こそ面白く打音へ
歌ふ出も衣をぞう拍子類へ

(哥)新古今　　輔尹朝臣

秋風ハ身ふしむうり吹ふうう
いとや出こうん妹りさこうも

夫木　名処擣衣　　家長

芦の葉ふ霜の降ふ出のうる出へうハ衣
ふ出の惜やさいぬ夜の音や

(詞)打ものる。打ものる。ゆさ
ぴうう。ひぐく。ものうしむ。つち
ぬうる。いそぐ。袋う麻衣。月の
衣毎。月澄む宿。月ふうえん

沈む。ものの女が寝ぬ夜し
らふ。衣さむ。袋ぬ衣の
出。うちあう。里ふ
。月ふうみてうの。うつる
ものぎ。いねうそふうう。たま
ぬうしてうう。夢さむる。風ふ
たくへてそうる。
。宇川。ものう。松風。ものうる里
。雁　夏ハ蘇武が故事ふうう旅ふ多くよ合
スハ旅ふありて古ものの表を知てうる色
あうひハものを出てうるうしう出る
なぐ出ふもべ

(連)ものふひぐく拍や月の出へ　紹巴
里ものさふも拍ものれ拍うる　仝

(俳)秋拍かて表て出ものを衣拍
拍ふハまう新しうものう自ひうる　連国　連二

ものう出ものうううう　孤拍　東暁
ものう出ものうううう　孤拍　呉竹
ものう出ものうううう　孤拍　呉竹

(狂)寺れ内ふ拍の出るの空ゆうハ
かの大くれうつうちうや　玄康

詩 砧五字對句

同上

星河秋一雁 天の河ハタリノカリ
傳音暗斷続 砧ノ音タヘタリ〳〵イタリ
碪杵夜千家 キヌタカ家〳〵ニキヽヲル
鳴杵自丁當 ツキノアトトヽナル

詩 砧七字對句

詩礎

四野山河通遠色 ノモ山モ川モ一ツニ秋ノイロニハル
千家碪杵勵秋声 イヘ〳〵ノ秋ハ秋ノ声ハケヽスヤウナリ
夜雨中 ヨルノ雨ニモキヽヲル
遠村砧 トヲザトノキヌタ

詩 碪之詞 王昌齢

長信宮中秋月明 長信宮ハ漢ノ成帝ノ母ノ住ノ殿
昭陽殿下擣衣聲 長信宮ハ昭陽殿ハ成帝ノ妃ノ居ナリ ソノ殿ニコロモヲウツハ羅ノ愛モツキテサヒシククラスライナリ
白露堂中細草迹 白露ハ堂ノ中ニ生タル小柳ノアトニヲキワタレテアカキウスモノヽ帳ノウチニ居テオモヒニタヘカヌルヨシナリ
紅羅帳裏不

毛見 モミ

木とゝり耕してかひもなき地と不毛の地とゝ云ふ是ナリ○博物志曰石い骨く川い脉ゆり草木い毛ゆり土い肉ゆり故ゆ毛見とゝ云

俳 毛見海て稜ゆて廿月秋の蜂尾毛見のかゝる咲め米て行く仙波

落水 稲ゆ実入きい田ゆ入置ゝる水とたゝすゆり

俳 ゆ為を苦ゆ身れ加し孔 百拙
一秋の秋とゝくゝや為水 江水

狂 身ふ志ゆるさむひ世帯ふ秋ゆて つゝゆゝ孔為一水ゆる 半龍

下簗 魚の身重くゆりて河下へ落つゝと簗とうゆて取ゝ

哥 夫木

為時ゝ名砧の川れちりやな
ふゝ行ゆ水いゝくゝぞ為そゝ

俳 ちゝ簗打の砧まて行ゆ虎 支考

△新結　今年の新系ふて織くる結と武州野州上州へ出せり

時令

此部ハ八月一ヶ月の時候をかける事を記す

△暴風　△野分。八月ふ吹く大風。草木を吹くるゆへといひ伝へ入う又山下へ出る風へといふ　和名抄に出

哥　源氏物語

風さわぎ村もりぬれば人ゆへもすゝ〻ろ〻ろ〻ろ〻れぬ　家隆

新後拾遺

かりふきの庵まそそのひさかれ　夫木

ゆかりたくぬ小の〻ものれ　後京極

きの〻ふもとの〻ものれ　ゆかりてそ〻〻園の〻乃そ〻

詞　吹そ〻る。ゆかり。ゆかの行末。あ〻ら垣ね。あ〻きゆかの。ゆかの風。ゆかりのみ〻ひく。

連　吹ま〻へゆかりや庭の花ぞ　紀巴

俳　秋菴いりぬれ建方ゆかり　柳居

狂　白雨と風のりそたる秋のいゆ水晶の玉そちりそる　小唐山人

肌寒

△夜寒　△坐寒　△漸寒　△朝寒　△そぞろさむ

物ふれて寒さ覚ゆそ〻〻

哥　新古今

紫風の潮そ〻〻ぐ　基俊

萩乃上葉の秋くそかすゝ〻

俳　ふ〻れ蒲団の寒き水　三鬼

潮さゝや石の仏と刻ひ寒石

長夜

夜の至りて長き冬ふ永き夜て秋の季しるい夏の夜の余り〻〻〻〻〻此月いたふ長く覚ゆる故なるへし八月より九月ふ渡る〻〻

詩　遅々鐘漏初長夜　耿々星河欲曙天　トモ見エタリ

(哥) 新古今

大ゝこの塚の松さへ秋ぞ物とそゝ
ぬれそいろ物とそゝ

(能) 初秋と思つるそへ秋ぞ来山

初汐

此月ハ汐の大ふ満る月故ないろ〻秋ハ金気〻金ハ水と得て盛ゝ故此月大汐有時ゝ〻〻無名抄ニ出

(能) 初汐やとゝ移ゝ大の拵え 凍巳

拵ゝ元藻ゝ作出や秋の汐 詩人

今見るや初汐ゐ〻れ名ゲ〻岩 風光

(詩) 初汐七字對句　詩礎

雲・日・半陰川・漸・満　吹・地・轉

他所ノ雨ニ空クモリ川水ガ一ス　九州ニ三月オコス

客・光・皆・過・浪・難・平　就・天・浮

月日ハ立ヲリ一ナミハヤリ高シ　天ハトドクモ夕汐

初汐　馨

寿潮之戯

伍子胥呉王ニ殺サレ其屍ヲ皮ノフクロニ入レテ江中ニ流シケルガ其屍流レニヨリテ波ヲ揚ゲ潮ニ依テ往来シケリマル時子胥白キ馬素車ニ乗リテ潮ノ上ニアリシヲ見ル者アリニノ是ニ恐ル是ヨリ毎年仲秋既望潮水極テ大ナル時ハ衆人旗鼓ヲ以テコレヲ迎フナリ

草木

此部ニハ八月草木ト出ス他ハ此印ハ三秋ニ用来ル物

初紅葉

○秋木の葉黄ぶ又ハ紅ゝ〻ゝ

紅葉する木ハ○機・樹・樹○合歓○其外数多ゝ中ニ

かゝでの葉の紅ゝ事ゝ人々大ゝ賞とる故紅葉

ゝゝハかゝでの事ゝ思ヘ〻ゝ紅葉ゝ哥ハもよ

もいかゝ〻〻紅葉ゝ竜田川

ゝたるハ雑木の紅葉ゝ竜田川

の錦ゝよゝれるも雑木の紅

葉ゝ〻〻能ハ〻〻薄紅葉〻初

紅葉ゝ句作ゝて八月ゝ寸楓

の〻紅葉〻もをるハ後の事
なりとぞ紅葉の〻ハ九月の部

哥 秦の[illegible]の名ある[illegible]葉
落るやせゝの流れ[illegible]

能 乗物へゆゝしき[illegible]名家 梅堂
物語の似の責[illegible]重頼

敗荷

荷衣。蓮の葉ハ秋
風ニ破れ折れ[illegible]

荷衣ハ葉と衣ニ見えたるゝ

哥 枯風ふき[illegible]沈の蓮葉も
波ゆ〻しくて[illegible] 公武

能 [illegible]のうゑと笑ふて夜[illegible]蓮

狂 白雲とまぢる[illegible]と月新も
[illegible]して見せる沈の破蓮 貞新

東坡

詩 敗荷詞

紅錦機空水國窮轉頭千蓋
偃秋風 夏ハニキヲオハタノ如タル
ハスノ花モチリ。アヽタノカサ
ヤウニ見エタル葉モ
秋風ニ打タラルゝ

鷺鷥一段榮
枯事都在沙鷗冷眼中 遠

花ノサカリニハ其ハアタリニアツブオ[illegible]リ
モ一時ノエイガハヲキハメレカドモソレモ
今ヤブレ蓮トナトロヘテハ[illegible]モオイヲ思フベシ
盛衰ハヨク自ニ見テ井ノカモノ眼ノ中ニアレジヤ

新蓋艸

秋穂とゝ[illegible]

俗ニ川安しいと 和名かとゝ[illegible]
異名 黄艸。蒹竹。[illegible]

本朝染色家ニ用ル物ト染レハ
黄色ニ成ル。唐ニ形違フ竹ハ
似て細くして[illegible]一煮て
染物しん本艸ニ出。[illegible]

能 福祥うり枯[illegible]
能階季寄ニ昔ハ[illegible]

名木散

出て〻分り[illegible]近世の
説ニ椿柞の類此頃紅葉して
散るの惣名ゝ[illegible]

冬の季ニ出る名草結[illegible]同意ニ
能 十日間の間ニ出る名草や名花果や名[illegible]芝山

牡丹根分

夏川の地とゝう乾
[illegible]古き圃の土と

細き砂と交ぜよく篩ひ八九月紅き芽と出ぜ〜後この土を接し栽べし糞溺と用ゆるいろ〜かゞん冬油渣とを已根のかさり〜ふ置へ〜

(俳)根とをてかゝの家の庭ぬてをもゆ大成

(狂)果敢ない盛て絡すり武蔵の冨もそれ根といろ〜そこへ 松室

木芙蓉

○芙蓉〜わ〜〜もい〜 ○木蓮白氏文集○拒霜事物異名 華木本艸 (和名)木くちす八九月初て開く故拒霜の名あり

○本艸李時珍が説ふれい芙蓉とふい荷花のこと偶此一物荷花と相似ることを以て木芙蓉と号くこと五五後世二物一名と混ぜゆゑ故終に荷花と水芙蓉といひ此月の木芙蓉といふ

(俳)敬いうちこなせ芙蓉 湖春

木芙蓉や敬そ恐ます紅もあり 岚雪

木犀花

(異名)巖桂○木樨○花桂○七里香○本艸家の説ふ木犀へ巖桂ことす本艸尤然り

類多し〜たし〜ふさだめ〜と此い白花にて香気甚高〜

桂花

是をべての桂のことを木犀〜ん一種い菌桂ふて葉に三ともの文あり其花黄色又白きあり但〜加茂祭りに用ゆる桂い花三四月にて是ふいあらず享保中南京種渡りて所々ふ移せ葉の筋末まで通る是上品なり肉桂桂枝桂心官桂此木より出るあり されども日本むうよりも桂樹はあり多く中世の人は用ふさる

月の光に雖て極て久しきの月はあるとて〜〜〜〜〜〜〜 光後

詞 月のみ〳〵○桂と折 ○桂の花
○かつれ行ふ○ひつ〳〵ち枝

能 白ひさゝ泰深ゑ汐桂花 李珍
ゑふぐゝり葦酒いゆゝせ木樨ゑ芭角

狂 只ひとり秋おりゝうゝたるの屋
侍も中稚ゑ木樨の花 実明

詩 凝露堂木樨 楊遅秀
夢騎白鳳上青空徑度銀河
入月宮ユメニ鳳凰ニノリテ天ニ昇リ
コニ身在廣寒香世界覚来
簾外木樨風身ハ廣寒トイフカウ
ガレキ世カイニアルト
思ヒシガ夢カサメタレバスタレノ外ノ木
犀ノ風ニニホフノデアリシレナリ

縷紅

葉細密にして杉
藻のごとし 浅青色

檀特花 一名西蕃蓮○葉ハ芭蕉ニ似て三

四尺ニ過ぎを冬ニ枯て春生ず
七八月莖とめんでゝ花と

ひゝく赤くして穂のごと
實となりて念珠〳〵す薏
苡仁ニ似くう
能 却く家の傍ニ植ゆ拾物記 亀山

金剛草 一名狼牙○其芽

獸の牙のごと

花の後 小豆の莢のごとく
して中ニ実あり根甚だつよ
し 牛馬を生ずゝ
能 弱つゝ人ゝ乙田

白粉花 夕錦 此花駿州

まい野徑ニ一面ニ

満ち咲て春苗と生ず冬い
枯る葉雞頭のごとく花丁子
ニ似て大抵赤一其外様々
あり実ニ白粉あり夕ニ開き
朝ニ萎む高サ二三尺ニ至る
能 わすれがたき小庭の草薫
狂 去年赤ゝ月夜の中ニ戸ニ
とゝのゝ花の白ひ 不一

花紫 紫艸の夏なり○若紫は春なり 花紫は秋なり 御傘に出 又若紫春に花は秋なり 連哥産衣に出 其外俳昏に紫艸と花紫といひて春なり然秋なり 若紫といひて春なり 然れども今世間にある紫の花は二月ふもあらず八月ふもあらず四五月に咲なり○雜談抄ふも紫艸と春秋二度に用ゆること決詮しがたしやの嫩敵にしてしいなり

哥 李白山の一りしゆへに武義のくさいにあらざるなり

烏頭 巢 艾に似て厚く花の色紫にして形は烏嘴に似たり肉にて名づく 茎物に烏頭と云は根なり

草烏頭 花葉象 大抵川烏

頭に類して藥力はいたつて毒力はいつよし 和州金剛山及所々より出る○抱朴子流のもの則この烏頭なり

俳 花咲は冬も一さいある艶 竹夏

刈萱 萑麥 葉毎に五葉 莖相對して生じ花は胡羅蔔又は紫天草のごとし 初青く後黄なり 女郎花に似て枝葉たくさんなるのこれへ或説に刈萱は芒の類なり

紫苑 一名○紫菀○還魂草○夜牽牛○古哥なし 物の名によりて此に入る

哥 古今 ふりさけて いとかの春を 思ひいでて こうつろひぬるる

○俊頼の抄 親の塚にうゑる故事あり 物にすれば一せれば 即ち鬼の[illegible]

草なるゆへ鬼のもと草又ゑとふくもいとゝかなるい万葉うす
是のさのうゝに對するゆへかくもかて名づけなるへ此こ
大よ論あり　補遺に出す
○謡曲大江山よ紫苑くらいあふ
やん杯ふのもゝさゝは誰
がつゆゝ　名なるそとあ

（俳）
ゑのころ草　花の色　見六

月草　漢名鴨跖草

蟬花と云○俗よ露草
△青花ゝも云○夜月の影ふさ
くゝいつゝ久しゝゝ咲くゆへ
百夜草ゝも云花の汁と紙
ようゝ染具ゝす故ようつ花
ゝもいひて近江国よ專らゝと
女の職ゝす昔此花ゝて衣とす
つゝる紙月ふさの花とゝろ衣色の
移りやすく恋哥ゝ多くよあり

万葉にゝ竹ゝ衣ゝすゝ紙ゝ
ゝ色ゝてのふいうゝひぬゝも

（俳）
ゝ杭のひぐ杭のゝくゝ色ゝ
同若や夜ゝ戸くゝ物いゝゝゝ屋

宇治花園

宇治ハ應神天皇の離宮ゝりしと
后よ太子の御坐ゝなりて御
原日御宮と申ゝ時の御園
ゝり是と兎道雅部子ゝ申
奉るゝり花園ハ多ゝ中ハ萩と
專らゝゝゝゝく今の人も同ゝ

慈鎮

（哥）新勅撰
着ゝゝゝのゝゝゝゝ
世ゝうち山の杜の花ゝ
○此哥ゝて知へゝ○箋紬輪
糸切歯等よ宇治の関白乃花
園ゝいゝるハ非ゝり其故ハ臣下の
花園とゝその子孫ゝゝて慈
鎮和尚のよゝみゝもゝ人ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ

俳 花笠の若人と落葉支考
[illegible]園[illegible]自性[illegible] 紹代宮白羽

滋賀花園

近江大津より天智天
皇乃御その〳〵旧跡あり 爲遠

哥 新後拾遺

[illegible]

名のみ[illegible]

薄穂

△尾花△花薄○初尾花○幡薄○音用物 異名あり

七八月長さ莖と抽で穂と
なす是即ち花なり形獸乃
尾に似たり故に尾花という

哥 古今 平貞文

[illegible]

夫木 人麿

[illegible]

玉葉 原薄 入道前大[illegible]

秋[illegible]の禁[illegible]

詞 まねく○なびく○秋風○尾花
波なる○袂○穂[illegible]

俳 和尾花風[illegible]

狂 招きよせてごろうえもやのみ
[illegible]の尾花なるうらん 貞徳

波[illegible]の薄

○夫木集又三種の薄あり○[illegible]との薄
鴨長明[illegible]哥あり尤[illegible]記す

哥 [illegible] 長明

[illegible]

[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]尾花の[illegible] 長明

花すゝき八月の末より穂をいだす
ゆゑなき名を付たるなるべし

○此三首の哥にて考へべし一首
は増穂なり一首は白さへて色
白さなり一首は穎芳色なり
又十寸穂と云て尺に満る穂も
いくる説多し　右の哥のごゝく説
頃より　右の哥のごゝく説
出して　いろく臆説あり信
用もるふ足らぎるいなり

根地草　河原に多くあり初
やね　蓼のごゝく長し
て葉五葉茎葉も黄緑枝
の末こゝに花あり八月なり

穀精草　又一名云一名
たいのぶり　○竹筒草○鼓槌草
○春より生ごゝくも花出
ざれば分ごゝ八月大鼓
のぶちごゝに花をひゝく
葉い細長し

俳　星茅や稿んと溝の天の川　東
星茅や結ひ一茎花ハさを　蛇喜

紫蘇實　一ふちりめん草と云
花暖ち實なり

穂となす　塩漬〳〵貯ふ

俳　紫蘇の穂の紅もはの名残九一
とろくのこゝる

黄蜀葵　葉ひは
ふ似たり

岐多　花黄色綿ふ似て大ひなり
俳　花ふらげ何ふ事なるとろく糊
ふ結用

烟草花　一名　烟花○たばこのこと
けむりくさ　ハ世人よく知るふ多
哥　あるなもむ浦をれも烟草
人のをもねのもとをこそ　後拾遺院

藍花　花赤して見るふ是
あいのこゝる　藍汁い葉ふ多
五六月ふ刈とる物ゆへ多く花
と見るこゝなまく種とる
為ふ残せり物ふ甚ふされいく
俳　一ふこの色ふ多くて藍の花月華

△蓼花 △蓼の穂。又穂蓼共いふ紅白数品あり

○大蓼。○毛蓼。○大蓼。四季とも花のある物あり枝葉少し

ちいさく味ハ賜ること大蓼ハ五六尺ふ立のび幹も太くして若ハ小四の拳

毛蓼ハ大蓼の節無毛あり

哥 万葉集

我宿の穂ゝて古幹つゝもゝ
ふるまてに君ゝ待つらん

狂 蓼すむ今ふ出をゝ刺られハ
畑ゝく鄙ふたやさしう 穂音

△蕎麥花 そべて稜ゝ云ハ
斯のごゝく箱の内

の角といふ世ふ紋如の角切
角といふ物ハ稜折敷ゝいハ物ハ

そべゝ云も実の三稜あり
付ゝゝそ花白く少し茎の下赤

一名 ○荍麦。○烏麦。花麦。種ゝハ
七月花ハ八月刈ゝハ九月あり

俳 蕎麥ハまこと花ゝて実ゝ
蕎麥の毛結てやたてる岡の松 連三

蕎麥故事

河漏 河漏津と云処

蕎麥ハ天下

第一ノ名物ナリ因テ蕎麥ヲサ
レテ文人墨客ハ河漏と云ナリ

蘆花 △芦の穂 一名 蓬蕀。
又葭ゝいひ葦ゝいハ

大小ようての名ゝ
ゝもゝし種類ゝ花ハ風

あゝて雪のごゝく
つまりその絮のごゝく

哥 秋風ふ汐ゝられハ難波ハの
あれ穂ようそ恋も移る重之

俳 芦の穂ゝ葵ゝ
ゝあの猛 表果

詩 芦花五字對句 同上

黄葉倒風雨 沢国幾千年
白花搖渚洲 漁村両三家

詩　芦花七字對句　詩礎

一灘浩々花如雪　舞秋風
川ノヒロキニアレハナユキノトキ

両岸蕭々葉帯風　迷夜月
ヒロキカシヤクヤクトメハオノカヒロキニ

項羽草　花いがんひのこくく
表紅裏黄く

俳　えむ馬の溝ふ乾すり項羽草　待價

虞美人草　此花とくしと季せつ定めしきやう

今案ふ此名出て口決なり侍る大和本草ふハ名花譜及い園史と引て四月花咲くいふハ今俗間美人草と云物ふ罌粟の変生の物と見えう一名美人罌粟と云う花彙。類說本草時珍ゲ說い各美人蕉と云うこも謠曲の項羽決斷ちなり然ま云の文ふハ露州迄て秋草の葉毎ふ影やるくいふ一部の趣意秋草ふ美人草秋草ふ決ぜり今案の口決いふんらをはているふ

べし謠曲の作意ふよりしハ本朝ふ於て美人草の名称をてふ三百年ふ及ぶ依て是と擬と

ぜん秋ふ決して可多ぐ

龍膽　〈龍膽ふ出す〉古今集ハ笹龍膽〈蔓龍膽〉三種ゲ花

葉ふも皆其姿ゲ

和名　えやみ草　和名抄　たつのこ野ふ色

延喜式　おもひ草　詩肉集　やまひいるる宝鏡

哥　古今集　物の名　友則

秋篇の花ふ色ふ

能　又ハ面ぐさ。ごめけく草

玄参　ひるのうすつぶ　一名　山

麻。野芝麻。蓋消草。数品

胡麻ふ似ゲ乗青ふて

黄色と帯てふ花い此月枯る毎ふ穂と生ど長さ六七寸肥さる
い二尺ふもいさ所ふうて小異
あり 江戸の花いしるの一つる
まてうん 跡いつ
ひるの白つかの名あり

木賊刈 砥呼と名ぢ多くう

(哥) 夫木 仲正

とくさる秀れ多ふのまれるう
くがいろる行の秋乃月
末織刈るしく乃 森こる秀て

菊萱 △萱刈 △萱蕾 △萱
軒端○三秋の花二丁目出

茜堀 異名 茹藍 (俳) よい名
小澤るも 茜塚冨天

苦参刈 和名 こひう草○牛
の舌癌○莖葉根と
りふ茎用ふ乗い捩ふ似くう
春生ど冬凋む花い黄白根い黄へ

(哥) あれよろるき田のあ秋ふら生そ
秋まれへくもゆれとろる汁 西行

たらやく刈 千振といつる物といつ
桔梗ふ似くう苗五六寸して一根ふ数
莖生ど然ども千振い秋白花あり

藥堀 此月茎草の根と堀る
べし 根実して気つよ

(俳) 茎塚元い供ふ月きあり四木
紙の柄ふ朱てかくあるうふ振文古

石榴實 一重ゆれい実と結ぶ
千重ゆれい実ふ

皮の内蜂の巣ふくく膜と以
てくれと隔つ実い赤く人の歯
のごく数甚さ多し 一つの内あづき
物数鬼子母神と祭るふこれと供
もるい子多るふ以ふるべし

妙薬 喉のかわ治まる

(哥) 續後拾遺 物の名
百くもころかくきるう移すし

〳〵黒髪のみだれうち あの

(俳) 木守りハおとびしめや柘榴かな 金流

つゝまれハ秋ミかしを付柘榴かな 會山

守りさとハ恰志のうくち柘榴かな 亀山

綴珠切て喰ひの音の柘榴かな 乙由

(狂) 一ツみて陸み座て行みよく 笑ひなりはさくろなりけん 松室

(詩) 柘榴五字對句 同上

低垂圓玉紫 西域移根至

テイスイエンギヨクムラサキニ タレタル三ムラサキノ玉ノヤウ（ナ）ル セイイキヨリネヲウツシテキタリ 天竺ヨリ子ヲワケテキタル

半擘碎珠紅 南方釀酒來

ハンヘキスイシユクレナイ サケタハ赤キ玉ノクダケタヤウ ナンハウカモシテサケキタル 三十三ヨリサケヲツクリテクル

(詩) 柘榴詞 鄭鮮

高枝重欲折 霜老拆丹膚

試剖紫金椀 満堆紅玉珠

高キ枝ハシゲリテ折ントスルニ秋フカク霜ヲカサヌレバオノヅカラ赤キハダヘワレタルヲ金ノワンニ入テミレハアカキ玉ウヅタカクミチタリ

銀杏實（いてうのミ） 花ハ二月なりギンナンハ唐音へ子を結ぶ甚遅

霜を経て熟爛を食する物ハ此仁なり○銀杏の仁二種あり三角の物ハこれ雄木之二角の物ハ雌木之

(俳) 古家や不知なる銀杏の実 青由

(狂) 秋来れハ葉まへ金の色ありて実ハおちらも見ゆる銀杏 貞室

茴香實（うゐきやうのミ） (和名)くれのおも (俳) 開るハ実ハ香木よりなくれの面 文全

通草（あけび） (異名)烏覆○蔔覆○ 木通のことく茎ニ細き孔通ず故ニ通草といふ実を以てその月の季とす

蔓荔支（つるれいし） (本名)苦瓜（にがうり） (異名)癩葡萄○錦荔支○蔓荔支ハ葉葡萄ニ似り七月比黄花をひらく八月瓜を結ぶ二寸より五寸ばかり

(俳) 苦瓜や血て吐るハ有と聞ぞ 不二

(狂) 青き若き良しして 若瓜の仁義とハのちやさらし 茶也

△王瓜 一名 落鵝瓜。地瓜。新羅葛 △なまうりのきゝ

の枕ノ藪の中ニ多く生て蔓中ニ多く生て蔓 五

六月花あり 括蔞の花ニ似たり 髯あり

白花あり瓜ハ括蔞ヨリ少ク

長ク秋冬熟して赤ク括蔞ハ熟して黄あり中ニ子あり 蟠螭の

頭の如ク似タリ又和俗むせび文のさゝなれども似たれば玉章の

名あり これを炒リ又ハ醤油煮

して食ふ

(俳) むつさやあるのまゝとる 移瓜 千子

夕栄や葉ハ伏れ果ぬかゝ瓜 仙丸

(狂) 後ハ喰るハかりすハさもあらん

蔓よかゝすの瓜ハいうまゝ 貞徳

△種瓢 △種ゑるとびいもべて夏未

ニ実とむすハ物ハ野菜

の類ハ来春まく種とたゝへんゑ

めふふくべハ茄子まゝ其侭

そ軒下或ハ火炉の上ニ吊ふ

乾そたゝとひゝき 種とるべし

(俳) 又七月ハ見ハ異のゝ移ゝ 秋江

蕪も赤ワ ゝむやなゝ 佳筑

△眉児豆 京大坂ニて△隠元豆と

△月九日三枝ニ黄蘗隠元始ル

持渡リしゝとゝ江戸ハ

豆ゝ西国ニて籬豆ゝ

(狂) 隠元豆ゝむとゝ豆ゝ 百拙

人の人ゝ ゝとあれ

△菱取 異名 凌角。角あり誤

てさゝれハ手足ハ疵つく

故ニ菱ハ凌角ゝの名あ

ハ八九月採るハ生ニて食ふ

△茸菌 △茸 △菌 △ハ如ク皆

名ニて分ラ

茸類の惣名ニて和名抄ハ

くさびら菜蔬ニて接ゞ

茸の字ハ同ゝくさびら肉ハ

ても笠ハ

ものとゝひて岩茸

革茸 木くげの類なり。○菌の字は笠ある物といひて松菌ト洽椎菌の類く。○和名ときのこと称するこゝは夫その木の下に生ぜる子なりしといふ心なり 椎の木の下ふ椎にけと生ずる類なり

たけと生ずる類なり

○菌は木菌あり △土菌有生ず

△松茸 松の氣とゆてその下ふ生ず人のゝ知る処あり○茯苓多き処ハ茸

西国ふハ茯苓多し

△茸狩 ゆへて草類と待とハ

俳 うへもしくさ先松茸と第一ものわや云伝へ云ふ○菌ゆ 遵二

△初蕈 秋山野の松樹有る地ふ生ず 喜多

△石茸 ○石芝○表青く裏黒く峯頭巌上ふ

げ嶮しき所ふ生ずる者なり

採る人番ひのゝて大木ふくゝ

ゆくわろうれて取ゆくゝ

ゆくあやうし

△鼠蕈 漢色 蘑菰蕈。朽木老樹の根ふ出づ

△針蕈

鼠蕈ハ似て繊ハ数十本並び生ずと針のゝ

俳 針茸や志ゐ女のゝ 鹿松

△榎蕈 △滑き 俳 おろ蕈

△やぶ合の佐の 牛森

△椋茸 椋の木ふ生ずる物ていゝ

へゝ形榎ゝみふ同ー

△平茸 異名 天花蕈 ○山林の湿地ふ生ず

△兎口茸 湿地ふ多く生ず微の表褐色端まゝゝ

ていゝゝ木似ゝゝ滑らゝ孔あり略蜂の巣ゝ

△紅茸 漢名 紅菌 一名朱蕈 和名 うぐひす茸。さて
けけ。赤きけ。仕丁けけ。緋赤
大毒あり 本艸に葛花菜 云も此類と

△萑茸 芦荻の中に生じ
俳 おそ茸やはふ法 季君
の名ふさう

△革茸 又麑茸といふ 秋野に生
ど色赤黑

△標茅蕈 △ちゝび 俳 松の根ふる
代の数寄ちゝび宗因

△舞茸 平茸に似たり 俳 茸ふ似たり
名ちりくり 黑人

△楓蕈 大楓子といふる木の上ふ
生ずるきりこれて食へ
い笑ふてやまびこいふう是毒の
あるうるへ笑ひやめへ死とる

△猪茸 △鮫茸 △天狗茸

△月夜茸。栗茸 △衿茸

つぎも秋生をるものくおのく
毒あり食ふへからず其外種
類多し悉く書ふ尭ふ追
あるべし又春夏冬ひも生
ずる茸あり
補遺ふいぶん

△松露 菌譜ふ麥蕈。沙壌
の中ふ生ずるいふ

俳 五つ四つ邦ふをれ 松茸ふ芭蕉
えるゆふ見ゆ 松茸ふ李由
寫の岩杖て拗ずせうふ 蕉丘

狂 茸 茸ふ茸のといふ虫こおさむけと
松の松茸のこと 中庸
○茸菌毒あると知る法
新茸下ふ文ふ物 文といふ茸の
夜光りある物。爛まて虫ふこ物。

煮熟して人を照し影を化物
○春夏蛇のうろ物○此うろ皆
人と殺さんとす慎むべし
○又塗物の上を久しく打くゆる

中稲

八九月刈はじめる中稲
稲としてこれより早
きを早稲といふ

哥 曽丹集 我もろ中務のつぼね
うちとけ〳〵稲を刈

俳 かあそぶ稲うち打て中務うり貝之

粟稗引

五月七月の部ふも出
うり今ハ両種ともに
晩種あり稗ふの穫黍の二種あり

俳 我門のさびしさ秋ひく稗畑 嵐雪

貝割菜

菜の種土と切て漸く二三寸
二葉の形貝と割るに似る
故ふいへ大根蕪も同時に

摘菜

小菜○二葉長ずして初て
葉の形調ふとうくるを

間引菜

摘菜の少し長ずるを
とりて種と多くうゆる
故長ずる時間をとらざる故名づく

俳 ちるハうろ〳〵の絡ふ紅葉
うり菜やみの緑の又はうり 可丈
菜畑さく分と入る間うり 冬花

狂 うり菜の孫も菜も同じ畑 隱士
かうるあさひう宮さやな

中板大根

やゝ長して根の大き
さ筆ほ油のごとく

菜種蒔

是ハ蕪菁の種類
うとはうこのかぶ
あ〳〵び是と真菜といふ又油
ふちばる物なれハ油菜ともいふ

俳 春と買ふまつの種も苗を家光
炭屋ハ沖ちうめ菜種うる飛蜀

胡麻刈

一名 昔嚢○此月
初の頃ハ稔
胡麻と菜と種る法のごとく
してうゑれハ苗と生ず茹し

りの杯ありてもし△壽命の
ふきりあり

種植

蒔△芥子蒔△大根
蒔△罌粟蒔○かし数種あり春
不老といふを第一とす白芥尤佳なり○大根亦数種あり○
八月十五夜に種をまけバ花実とも大によし○いづれも八月種をまく
なり三才図会に出たり
俳 けしまきハ悟の路徳かな 仲甫
学窓のいなか坊主や芥蒔 紹簾
大根にゑゝ乞のためにあけて蒔 清白

生類

此部にハ八月一ヶ月の生類をあつむ

燕帰 △燕いぬる○燕ハ春乃社日に来り秋の社日に帰ると本艸綱目に見えたり 二月の部に出せバ爰に略す○燕

とそのりは春なり本艸に越燕胡燕の二種あり越燕ハ常の燕なり胡燕ハ和名阿萬止里といふものにて俗に深山燕といふ
哥 夫木 巣をとひてゆくらふ燕 わかれさへ秋の風やうれしき
俳 いぬ燕行換の札の字ゆ真 皇真
何ごも先往にあふそかへり見 長水
古丈ハ遠なりし去ぬつばくらめ 嵐雪
物いふもいそがしきまでかへるつばめ 望可
狂 燕の住らぬ家も秋の風吹けば惚ゆかりのかへる乞をみ 如来

詩 帰燕詞 崔道融
海燕頻來去 西人獨滯留
ツバメハ海ノ上ヲ春ト秋トニタビクイクリキタリスルニソノ燕ノスミカニナル我ハイク年モコノ他国ニナガトウリウスルコトヨ
腸斷故園秋 天邊又相送
ハラワタノタユルホト故郷ノ秋ノケシキガコイシイトテコトシモカノツバメガ空トヲクカヘルヲ見テハ

△稲負鳥 諸家の傳説多し詳に其理を明らめ元来古今の三鳥の一にして極秘なり

哥 夫木

秋の田の稲おほせもてうしろめたしいもの穂ぬきの澤のかりの

家隆

古今

山田もる秋のかりほの仮ぶきの苫をあらみわが衣手は露に濡れつつ

忠岑

一書に三鳥化用の哥とて 赤人

民の竈賑の家に煙たちにぎはひにけり

能 父母や君とおもへば寂心

狂 もつとやもつとも何とまつとも 貞木

△鶺鴒 異名 鶺渠 ○雪姑 和名 △ふねたたき 綺語抄

△石たたき 同州 △ふりくなをり 物名抄 △ちりをしれる日本紀私記 △ちりをしれる 八雲抄

○日本紀神代巻いさなぎ

多くの二神始て夫婦の事を行ひ給ひける時鶺鴒庭に来りて首尾をたくくと見てさうしをしいふそろぎ

これより其外異名も皆尾をたたくとなりていふ

哥 夫木

ひとなくしおれる妻のいたくなれさかりをこそ人なれはそへ

寂蓮

能 知まいとやふの尾のたくき鼓

怨昊の尾をたくもはかなき

狂 せをなをいいつるかをとせるけ

わがへるこもせるこへり 國長

△渡鳥 此月諸鳥むつかり飛ぶ事 余月ふるぐ

して多し故ふ此月の景物とそうそう鳥と云ふ等のてくく寒と恐るして地とう渡つと来るなりといふなるあらず秋の草木くもふ実とひらひ熟こと故うは是と求食してむま飛ぶ中にも異国よりう大洋と渡り来物多くに

(俳)かいうへの前めてうの渡りる芭蕉

一ひれの川へうりう渡りる扇甫

渡りる雲はそうそのみ弘弘薫村

朝鳥渡 雁鴨 うぐ朝とく山の尾と越えきうると

(哥)万葉 あうこみたて岩ひ稼ひ多

わうあ坂る朝越うこて下暮

(俳)朝きも渡るふ名の一羽弘芭蕉

小鳥渡 秋は色々の小鳥渡と

いくロの渡鳥と上うく

(哥)雲はうう雲ふ小名ひ渡るふい

何ぬうへの浦のひまるそ 実房

色鳥 是も色々のうつりき小鳥の渡ると云 御傘出

鶸 雀より小一全体黄色うそ彼ひい色ひい

終るぐうへ此鳥のいろくとこ一青と帯て頭脊黒色く其声清滑うてとく囀るうヒユン チユンといへがごと 種類 河原ひい○唐ひい○紅ひい○蓼ひい

(哥)山家集 声せまいろくとくうとく

いまう柳のめくむひいのひくる

(俳)山吹のうる子もく鶸の多天流

山雀 ○山陵鳥○形ちうよ似て好んで胡桃と食ふ

餌囀りて輪とくる 栗草又いこ

ぐとかごれ角ふ置い孫ごろとする

(哥)新六帖 山くおまうふうるはふうた

はるあのいうふいこうろうう 光俊

(俳)山うくふ待鶯つまて司石素徳

山うくやはしてひ秋もれ 皐月

△鵠 小陵鳥○山雀に似少さし
○小〻光〻しく人に馴て此鳥
あまた集りたれ合て眉を故とそ
哥 夫木 ちひかさ小〻ひとりとそ〻る
我ひとり 秋の夕〻
山家集 ゆ〻しく友と枝ふみわの
はな〻れ このむ花のしゝさゝ
俳 川とあの押かゝてれる小雀外秀

△四十雀 △五十雀 小〻〻ふ似て大なり
○五十雀四十雀同鳥なり巻て毛と
人此形のかゝるを五十雀と号く
△日雀 四十雀ふ似て少し頭脊
赤色頬のなり黒白
まだらる一書ふ緑鵐とかゝる
俳 潮ふ移る竜田川への月雀なる水奴

△猿子鳥

三才圖會ふ
いろる物又今
りてをやを物も全体薄黒いろ
胸腹うす赤尾の下ふ白き処両端

ふあり されども哥ふよりこいて
まうこ はくこうて此鳥のこゑ
いかゝを鳴く貞猿の子のごと
しといふる哥ハる

△照猿子 藏器拾遺曰突厥雀
そのかたち雀のごく
そこにして身あうゝ
照はこ人伝う母の餌ふ到遠こ恕知
哥 夫木 名花の多くふ さめるてゆきこ
紅葉ふ かゝる木赤ふ多く 鷹三雪子

△頬赤鳥 雀ようふ小さ一 頬ふ
くしひろ〻しこ声
高くしてやそ〻
俳 三の月ふ秋のほあれ 秀穂 建馬

△畫眉鳥 鶯ようふ大なり 灰
赤色眉白一名ぐ
ひと頬白く声滑ふして詩
きづる小鈴の音ふ
と片鈴といひ チリくコロ〻チリくと
くこと備鈴といふ○深山やろ

いわゝふ似て帝ところ毛冠ところ
(俳)わかるる訳るの脊をと鬱る色詩信

瑠璃鳥

大さ蒼の小翠蒼の二品あり

眼白鳥

(俳)大濃小藤の四ツ　秀石

(狂)角力とも小ぶ作ひとぶくふ
出ぶ行る来ぶ来れ一あひそする　東関

鵯

(一名)鷲鶫。飛んで多くむらゞる濃ゝう小く色蒼白く頭上の毛起る好んで草木の実と食ふ○草木の種をへがくれ物い其実と此鳥ふ食ひめ糞の中より出る全く物とりて

まけい極て生ど級この鳥の性こざりして常の網ゝ好れがさい
がとして逆さ方ふさがりぶりの放ると待て飛ぶと是ふ依て小ふ
ゝ袋のとくしてとるるり是
とひよどりあゝとゝ

(ゑ)夫木　こ死ふふまこ行ふ
ふゆゝとも芝ふ

(俳)ひよどるい核の金ちゝ根ゝ蔵雪
鵯の実やりとうりて日和ふ道三

島鵯

近年異国より来る鶏
卵をうらして養門

鵠

○魚狗本草魚虎鳥二代峡孫出
(一名)碧衣ゝ釣魚翁○水翠
○金鳥○水邊の論うう丸ゝ
ありて魚とうかくいとう雀ゝう
とこ〜大ゝう尾らでかく口
ぞ〜赤く大ゝう腹足赤〜羽い
碧緑ふして尤美麗ゝう
○神代巻曰天稚彦殯の處ふ

鵠と以て御食人とすゝこゝう
是即魚と取ゝ故ふ其役ふ世成

(ゑ)蓑とのむ蓑の格の蟬ゝう
ね衣ととしかゝ蓑の川せゝ公奥

(俳)鵠や彩〜格ふゝたるゝ大事
川せゝや三尺ゝ祭ふ已ゝうけ　芭蕉

翡翠 〔名〕山翠。魚翠。鳥と同物にて少し大

山谷にあり。同じく魚を食ふ。都て赤色紫色帯て光あり

連雀

雀の大さ頂に冠毛如あり。雛のときは黄色。赤色。黄色あり。唐の雀なり。和名抄に出たり

◎漢名に練鵲といろい音也

同じ。あくまでも別なり。なれを本朝にて尾長鳥と

いふ。三才図会に出る。次に出る

(俳)連雀や朝出の枝に孔あり 夏目

尾長鳥 〔名〕三光鳥 〔漢名〕鳥鳳。絆碧色

脊に少し赤き帯あり。冠毛あり

目大にして瞼青し。其尾長さ

一尺半余なり。群飛して声日月星と云

(俳)尾長を長持らるゝ鬼瓦 昌廣

(狂)ふくろや女に似たる尾長鳥 紅葉山人

啄木鳥 〔名〕百木。鄧木。地

古里。尚品類あり

大さ雀ほどなり。大小あり。小と小ゲラ

大と大ゲラとあり。小は毛羽黒白

相交りて美なり。雲雀の毛色

もあり。足は黒く前へ二ツ後へ

二ツ出て壮鶏の如し。又大なる

りのは鶏より小さし。惣身に

五色の彩色ありて頸の

紅なるもあり。是を山きつつき

といふ。また啄木鳥と釘の如

しもとつきとも木とつきとも虫と喰

人。今はテラツキといふテラツゲ

ラの轉じたる。ケラは木の轉へ

(狂)夫木 ふくれる麦の株ふくろ

あるそ色ふくろてつつきとうか

(能)あつきを雑作なる家の彩蓋

まりひく法る柳やきそ 半意

(狂)赤き衣を着て彩花の上に
まつきうくきうくきの色良新

(詩)　啄木鳥詞　王元之

淵南・啄木・大如鶏頭・似仙鶴
堆丹沙・ワイセントニ五トコロノ〻ラツキハ大サカラスホドアルガカレラハ
ソレニ似テ赤キ色ガウツタカイ　觜長数寸勁如鉄
丁々乱鑿・乾柏・査・クチバシノ長サ一二寸モアリテ
鉄ノコトクコトク〻トレニ　カレタカレハノカツホ木ヲ
ブミタリニツ〻タ

△菊戴鳥　大サ目白ノ如シ頭ハ黄ナリ花ノごとく
なる物あり一書ふ戴勝鳥とあり
虧土ヲ花ヲ花勝といふ
多り故ふかく名つけうるなり

(能)菓つくれば色こそえつゝ弥永秋　天雄

△椋鳥　形鳩ノ如シ頂白シ
脊灰色好んで椋の木
ふもむあり大小あり京師加
茂のほとりに此鳥いあづくい

なるりど美あり

(能)椋鳥のもろふ慶くあるべし由

(狂)鶯ふ鳴ぬ花のうぐいす
ゝろのむくふまうあ寄名　文海

△葉鳳　鵯ともかく〻ふ
○一説イカガ　やいろう

(一名)青鶺鴒○口ボソ　黄ふて毛
雌色あり甚奇麗なる鳥なり
米を食ふ殊ふつよくて人家ふ
飼て世話なり二羽同しく籠ふ
入るゝ紅いつてこあ人故一羽うへし
声甚清くしてヒチリコキといふ
又月星とあくもあり春夏多く
ゝれも秋の季ゝ雌ハ色あ
ゝく養ふハ多ゝ
とあるれバ口の内ゝそまりて皮
とうゝふあり

(三方)二条中納言定高ハ家隆々ハ〻ハ〻ハ〻
いるかよ夏ゝ図とハ後もさそ
ひろうこれこハ行とあくうん

△鶺子鳥 蓬ようの大さう黄黑色食して味よし日本紀

天武七年十二月縣主[illegible]馬薮矢面南より東北へ飛て見えず此外にも數千群飛て見る人怪異とせり事まうあり本朝國史和名抄等鶺子鳥又獵子鳥の字を用ゐ其故あるべからず。和名抄うゐむ〜かつこ飛ふあり云列卒が山林を滿るがごとし故ゆ獵子と云へり云々

能 花の怪雲と成て来茄

狂 なすびの花のあとより出るなり 徳音

△鶲 大さ雀の如頭黑く白き彫あり霜うのごと

△鵐 雀に似て枕草紙ふみこく云ハ是も此鳥の目の外ふまるるもの物の穴の縁を金物にて覆ひた

ものに似たれいくたの種類甚おゝし此鳥の目を

△蒿雀 此鳥形鶯に似て色青く黄を鶯に同物にて青鶯ともいふ又或説に鶺鴒を雀とせり

別種ありといふ

能 月移ふ[illegible]

△檀鳥 好んで かれ木に住む 形鳩ようの小さ灰赤色眼のふちに白色あり嘴二すむなり 諸鳥の[illegible]真似び人の言ともなしゝ人気あり

能 かゝるふまをたくみ文云 文全

△額鳥 小さき灰色青を帯ぶよく囀る一種照鶴あり頂に小紫點あり

能 めくもやもの井の上にかゝる羅文

△伊須加鳥 正宗未詳 上下ひちがひる

身をり故ゑ世俗諸事翻譯
ゑ〻いをうとつゝ又畧して
すゝもいひ又轉じてをくさ
んとつゝれと又轉して江戸
をてをくんといゝ
俳いとゝ名る志臣の物を乞ふ鹿松
狂石膏といへ附子をそゝろ〻ふ
医師ゝいとゝれをゝ〻ゝ已ゝく角鹿

初雁

八月初候ふ鴻雁來ること
礼記ふ見えたり此ころ
早く来る雁をいふ哥にも
初て来るゝ志ゝれ九月ふ
初雁のゝゝゝゝある哥も有八蟬
○元来雁の此頃南ふ来るゝい
北の国ハ寒氣甚しく雪深く
餌ゝ乏しゝゝ故南の国へ来るゝ

(ゝ)室治百首　初雁　信実

ゝの秋のふ井玉つさのゝゝろても
今ゝそあれと雁いさたれり

千首　近初雁　耕雲

身あゝゝゝゝのゝゝふ少ゝ少ゝく
いなゝゝゝ世ゝゝ初雁乃ゝゝ

詞 初雁の姿。今朝少ゝ。
今ゝ名ゝゝゝゝ路ゝゝゝ雁

俳 初雁やゝゝゝふ蓋の孫波山音颯
初雁や机之美ゝゝゝゝし幾竹

雁

△雁音△雁金△ゝゝゝ雁
△ゝる雁△ゝゝ△天津雁
○雁のゝゝ△雁の玉章
異名 雲侶○霜翰○蒼ゝ野
鵝ゝいへ梵書ゝハ僧婆ゝいへ
かゝゝゝゝ音ゝゝゝゝゝ云説ゝゝ
てゝゝゝも詠ゝ来ゝゝ。又万
葉集ゝかゝゝハ今ハいゝきゝゝ
詠ゝゝゝゝゝゝれゝ雁の名ゝ
ゝゝゝ大抵四種の別ちゝゝ
○真雁○白鵝○鴻○雁金
○白雁ゝゝ

鵝

△野雁ゝゝゝ 漢名 鵝 鵝
○性多淫ゝて他鳥ゝ交

鴻　〈菱食〉ともかく。雁の大なるを云ふ。菱食ともかく。雁の大なるを云ふ。

變　ともしく　かなさくして羽毛も變ずるともしくして鴻と同し

詞　夫木　くりうね　家隆

久かたの雲ゐはるかに鳴くれば今宵かくれ
ぬるとこそゆく　早田うづ

詞　月夕よ　月夕よいふ秋やきむき
郭　水東　るかりみ羽衣　重之

秋風や雁の〈おくこん〉一ともの
おくれぬとまきてゆくこゑ師光

詞　そらふかぜ　今そもを井とて
ゆくこゑ。なきてゆくこゑ。かりがね。そらふかぜ
ゆく。なのこうがね。けさこうがね。
ひとつ〈〉ゆく。美濃。うけて来る。
数〈〉来ん。久き数ちふ。かうてへ
来る。秋風の吹き来まる。秋風さそ空
一のつら　とゆくハ一のさび時行列を
そろへて　ふゆくうり
一の玉章　とゆくそ来るれ一のいとそれ玉と
みそ来るれ　ゆくまうつき

の樂武ら故事一の使られもそばが
の紙ゆ来るを　ゆくのようまる
泪　一の泪の斎をこのるえてこう
きろりのなり
琴　一とことぶふ　舟　おきゆくそ
ゆくこうこう
衣　一の擣衣　源　ゆくゆへ美
くゆくこうこう　会ところ　ゆくもえこ

連　一もえけ　秋　ゆくの行の声宗祇
雲　ゆくはて　かこす　羽風　ゆく肖柏

一ともたよう　とゆくはまえの紹巴
能　一の影　陸更　ゆく　水をむ　川汀　不二

狂　こそいは　ゆくを　ゆくこうこう
羽風ふ　旁を　ゆくこうひこ　常樂菴

詩　雁五字　對句　同上

忽聞涼雁至　**下時波勢出**
ハズカリワタルヲキヽバ　ナガオリテ波イキオヒヲイデ

如報壯陵秋　**起処陣形分**
北国ノタヨリヲキヽヤウナリ　タツトコロニギヤウフタツ
カリガトキフセイカヒラケル

詩　仝七字　對句　詩礎

数声飄去和秋色　**雁幾群**
スウセイヒルカリヨツテワレニシウヨウヨ
ガ声々上ヲ去セ恵ハ〈ハ〉ヲ秋色ニキハ　カリイクムレニガフ
イクツラガフ

一字横來背晚暉　暮天飛

玲瓏窓

詩　聞雁

虹影侵堦驟雨餘　声々新

雁渡雲衢　二ビカエンサキカラタヾヤウニミユル　ニハカアメノフトニ

コエ〳〵ノハツ〳〵ガ　鬻弓　欲射仍停手

只恐燕山有帛書　タヾオタタハエミサンダラニハクショ　ラヒイテ此ノタイテ

タハモシ北国ノ燕山ハ軍ニ往ク人ガ都ハ文ヲ此ノ

ニコトヅケ、オヒタイモアラカト思フユヘニヤ

雁之故事　雁四德　本艸綱目ニ云ク鴈ル時ハ北ヨリ南ヘ行ク

熱クナレハ南ヨリ北ヘカヘルハ信ナリ

飛ニ次第アリテ前ヨリ殿ヲ鳴ソ

ルハ礼ナリ　偶ラウシナフトキ　余

ノ鳥ニ配セザルハ節ナリ　夜ム

レヤドリテ一羽ハソノアタリヲメ

グリテ守ル書ハ芦ヲ啣ヘテ矢

サキヲサクルハ智ナリ　已上ヲ雁

ノ四德トスルナリ

雁書　漢ノ世ニ蘇武胡國ヲ

征伐スル時大將トナリ

テ向ヒシニ軍不利ニシテ敗

ノ虜トナリテ帰ルヿヲ得ズ然ニ

匈奴イツハリテ蘇武ヲ死シタリト

云ヒ其後和睦トノヒテモ蘇武

ヲ帰サズ漢ノ昭帝蘇武ガ死セ

ズシテ匈奴ニトラハレ居ルヿヲ知リ

テ使ヲツカハシテイハシムルハ帝柳

節ヲ射サシメ玉フニ其雁ノ足

ニ蘇武カ書ヲ繫ビ付タレバ蘇

武ハ未ダ存命居ルナラン帰ス

ベシト申サセ玉ヘハ匈奴大ニ驚キ

蘇武ヲ帰セレトナリ　実ニ雁ニ文

ヲツケタルニアラズ漢ヨリハカ

リテ斯イハシメタルナリ

鷓鴣　昌塚の詠ふハ春と

貞穂の説ハ秋

渡り来る時定まらず

小島の日本へとゝまるハいつの秋

ゆへ此鳥も秋しくすなり三月
生類の部に委しく志るす

△鵯 △日雀ともかく○四十雀
に似て小さし背ハ灰赤色腹白

△鷦鷯 ○たくみ鳥○巧婦鳥○
状黄雀に似たり

△鶻鵃 大さ兄鶏のごとく首眼
猫に似て又老ぶる兎に似
たる故木兎とし日本紀に見えたり

俳 木兎の羽かり落るか柳かな　蓼風

△鮭 正字鮏なり○大年魚ともよ
状鱒に似て肥大なり二三
尺四五尺細鱗あり○鮎と同じく
春江海の間に生じて秋に至りて
河上に上る秋の末に黒点を生じ
て死ることあり一年限のものの故よ
鮎を小年魚といひ鮏を大年魚とも
いふなり奥羽の間に多し衣川
武隈名取川等の物上品とす

俳 氷上ハ天狗なるらん鮭のかり　潘山

句 きのふかちにぞさてそれハ衣川
をそおそろびてさけのかわらん

△鮞 鮏の子なり二胞あり胞中
数千粒をくせたり大さ南天
の実のごとし又筋子苴子とも云物あり

俳 はらら子を松擂にかへん寒夕哉　京巴

狂 えぞらるゝ子からぶらくいる殺されも
それ釈迦ならぬ鮭の子　若茂

△加志加魚 △かしか 嘯○説々 鰍々 として未だしらず
魚の○ぎぎ○くビ○ごろと○かく
れもふなり是なとべて山川にすむ
ぶり○かまつか○すなくみ川の中にて
ギゝと鳴く声あり鹿に比して
かじかといひ又一物にあらず
諸々方言も有なり又一種春
季とするかじかハ魚にあらで
むかし井手の蛙といふ物なり
此説藤堂楽庵初て云出しける
なりかくふれば拙夫魚なりか

まつかの花荒川まそ川なとへられと石かとくとく　和

不分明

(俳)　俤くそ爾加稱ふ　懐書

△江鮭　本艸　鮭○草魚○鱒　見えそう　大和本艸ふ　鱒

魚こかけう○狀鮭ふ同ー湖中ふ生をる物名と異はて形少小也

(俳)　あかれの奥今ふ幸後の宗ふ　大成

白鮭の名井ふ　こしあ丹魚　昌廣

(狂)　とをそをそかまこ瀧の面ふ紙

ふうをしをしをしを後の冥　行理

△太刀魚　形そうすく長く銀箔の光あり太刀の白刃

ふとく似そう故ふ太刀魚こそ

(俳)　太刀魚や今も八角ひるそう　綾

三アハの左刀魚光る雲　和歌ふ　萬抑

(狂)　太刀魚と今ふてとくれのこをれハ

太刀うをいさのこまあてをるるかも

やつこまいつこあてをるあろ不知傑著

△落鮎　△鏽鮎　正字鰤　李草　和名抄

○夫鰤ハ正二月の頃江海の間ふ生ー次第ふ河上ふ登る石間の瀑布何程水勢こそも凌ぐこそのをりう夏の頃漸肥て味美へ中秋尤長大ゆして尺ゑ及ふ此時草間ふ子て生ーて後漸く衰ふ故ふ流ふ下る落鮎あくふ子水ふ隨ひ下る落鮎

こいふこいふ此後全躰ふ黒斑の点と生ぞこれとさびしく

(狂)　おもなや流れる鮎の川抄

上象ようちる枝冠そふく　家隆

(俳)　さび鮎やおいふこそ光るなりて

流ゆるやふふく　こけ　薫

(狂)　たををこのをはあふこひ鮎の

おちひ末のみもおろ後ー　国長

△下梁　梁ハ奥こそる具ハ川の両岸より石堰中と一丈

計明て水と下一其処へ竹の簀と斜に掛さし置い水い簀を潜りて流れ魚い水勢にまさぐひて簀の上へ躍り上る有るる

(字) 夫木 いとふぞや世ふる川の下簀かくるこゝ何なまぬ簀をぬもゝ簀こそ

(九) 崩梁 秋涼しくして魚梁も河水に流れまし崩れ次第にしてまてまさるる公つ入るる

(能) 岩に梁 百人一首 あしの屋の里の通ひ路人目も草も枯れぬる岩に梁

蛇穴入 俗に曰春の彼岸に出て秋の彼岸に入と云

月令に蟄虫坏戸といふ諸虫皆かくれ入て然るに蛇は穴塞るゝ能なを多分鼠の穴に蟄を其蟄とる時土を含んて穴を入春穴を出るゝ此土を吐く是石と化をへられと蛇黄といへり

必用

此部に八月一ケ月の要用の事をあらす

破軍向方

夜 五ツ 酉ノ方	夜 四ツ 戌ノ方	夜 九ツ 亥ノ方	夜 八ツ 子ノ方
夜 七ツ 丑ノ方	朝 六ツ 寅ノ方	朝 五ツ 卯ノ方	昼 四ツ 辰ノ方
昼 九ツ 巳ノ方	昼 八ツ 午ノ方	昼 七ツ 未ノ方	暮 六ツ 申ノ方

日刻 酉の日酉の刻申は申の刻事とす用ゆべし月建へ

出行作事 東北の方へ向ひゆくは今月天道東北へゆく或い普請又は土とるも東北の方とはとする

樂事 月の逍遥虫の夜遊いまだ暑さ消さるぞ花をしこと風袖ふるし草小玉ちる暁の露木に白ひと夕暮のたのしと野山の花錦と書て離庭に色

鳥のいろとあしとをべて無
と儀ふさぐこと〻れし〻

占候 此月外の日庚の日二ツ
あれい米麥とも。虹あ
きい春ふ〻うり米の價大ふ貴
し〻秋分の後霜多くれい病あり

天氣 此月日和のうること早
くして見さだめ〻くれ月
うり暴風折々おこることあり
海上慎むへし〻〻○雲い西より行
と日和しる北より南へ行と雨
しる○水まさる雲い雨しる然ニ
も初めふ雲うすくありて散ぜん
すう水まさい日和うり○赤き
雲〻〻い災あり○紫の雲〻
てい大風〻戌亥ふ雲あれい風
生ずる〻此月陰氣さかふのゆ
ふより極めて風も高くあがり
大風ふ〻ことあり○西風と日和
〻南へよりても北へよりても
日和しる○北風い雨うり夜分ふ吹い
夜北より〻と称して日和しる

衣服 帷子と着ることあり
袴ハひい色とりも也

時色

萩經書 堅書緯蘓芳
ようり裏あとし

二藍 紅花し青花
花そ深る

蘭 表裏とも紫

葱衣 裏薄もへぎ裏青或い
此草ハてをりもすべし

女衣服 八月朔日より十五日まで
ハかいひ移りかよ〻〻

薄 〻〻のうすやう〻〻〻
〻〻れのうんやう

龍膽 同じく又
うすき
白きひ〻

もみぢ〻〻あり
○八月十五日より九月八日まで
綿つきぬ〻〻の衣うきを用れ
うす色白き菊〻ぢ移ぢ長間

養生

素問曰脈に秋を逆ふる人は冬に飧泄を病む苦を食して是を下べし亦酸を食して是を救ふ

○此月に入て涼氣来りて人多く風を感じて病をむす慎て風をさけ全し

月多く生冷の物を食べからず

○白露の節後い毎日壬寅の時兩手を合て正しく坐し膝をゆるし首を左右へ廻し各三五度して兩手とも左右へ廻し液を吞て腰脊の経絡を叩き内へ吐して叩き内へ吐して腰脊の経絡

風の滞り狂癲癱等の症を去べし尚委しい歳時記に出る

めしげ

月のさし多くふるの苗を踏こなくべし

其外此月用意の品歳時記に委しく出をゆへ略す

飲食

此部に人力を費なる食物をあつむ

鯽

鯽の二寸ばかりなるを塩にて煮て此項に載る

東都及び関東筋にて生の鯽の三寸已下なるものをひしこと称へ四五寸なるものをいうこと

(俳)冷やとは大根おろしを絞るか 大流

(狂)小いかいあぶりて出てあぶりも

かまきはぶをあぶるいろ乳 皐月

いかの味くはしき秘傳

すのと頭をとりて梅酢に一日ひたつて引上げ其後三杯酢に半日ひたつて引上げ鉢にて挿

も入まぜ

らふしてあぶりひ美

○さけ贈い身をさき散を去て生

ふて酢或い味噌に謝味をほ

畿内にてこれと

ものとなる

△鰯黒漬　豫州の産　魚を切り　丸　うたて塩水に和し之

△新酒　○あらき酒　又早く　出る故△新走　酒は唐土夏の世より初る日本　かてい憲神天皇の御時ようそ　博物筌り出てそう

能　松風ふき酒と呼と山路に蓮二　笠嶋して早うあやまる彩酒に百史

狂　酔人附いんかのたふもとをもとめる　世のふうとはさるそれ　不一

△滷　酒の熟して　きし汁滓交て　ようと云

△中汲　酒のもろみと清とを　清ざるへ色白酒の　酒ともろみの間ゆへ中汲と　味常の酒ようきろくて美なり

△醇醪漉　是い唐土の名へ酒の黄　色ふいごうしうと云

酒異名　聖人　色清味の賢人色金の　ようと云　○愚人　色くろく　酸と云　○小人　酸と云　天中記出

○杯中物　李白　詩出　○羅浮春　東坡　詩出　○忘憂　物同　上　○玉醴　十洲　記出　○釣詩鉤　東坡詩　ふ出　○掃憂帚　同　上　○麦生　開元傳　信記出　○玉液　事物異名　○芳醞　同　上　○清醴　周礼　ふ出　○美禄　漢書　ふ出

亮酒　白氏文　集出　○杜康　事物異　名出　○破悶

將軍　同　上　○瑞露　東坡　詩出　○葡萄酒　三補　夷録

狂茶　天中　記出　○歡伯　易林　ふ出　○竹葉　孟浩　然詩

流霞　詩学大　成出　和名　ゑじゃく　万葉

竹の葉　夫木　ふ出　みき　日本紀　ふ出

酒種類　醥　そめる　也　酉　酒　盛　○醇　あつき　酎　正月ふかして八月ふ　ろくろく造　醇　○醴　ひくさけ　酒　○醪　ひくさけのくそ　もろみのひくさけ　醪　いとうろく　醪　さけ

○日本酒の種類いろ〳〵あり出る時節ふよう四季の内ふ出を

哥 万葉 ひーと 大伴旅人卿

酒の名式ものこそ思いまへの
れもなれいろのことのようさ

歌ひるまといつもも酒のくすり
ふとせるにおふ去ゐやも 仝

あそびあれ玉といつもひとりをふ
いなるさけふあふまさしちや 仝

酒の名ふまりれのきくをこうそ
名とふくらん玉の名 隆季

朝ぜよてこそひのてよこけのこと
いそとそれくまわてなき 俊頼

あちさめれ之編のこうがふくす
秋のりちれちまくもも 長屋王

あのすれつる落葉うえつ先て
春あくむる秋のさうき 後京極

俳 屋原もと呼られ酷る 天雄
りうこ酒の難の律と禅心の 片久
太の春〳〵やはきかりろ 文金

狂 かくしる酒のちくりくの
作れちくもかるよ 拙ろへ 行安

酒のみくこのくこうくあり 貪道

詩 酒五字對句

色笑榴花重 光浮蘭葉翠
サケノイロハザクロノハナ イロアウカベ
香兼竹葉醇 色消鬱金黄
サケノ香ハタケノハトヒ サケイロハウコンノキイロ
トリニカウバレイ ナラカツタヤウナ

詩 酒七字對句

詩礎

曉日着顔紅有暈 喧疎酒二
アケヒカゲ カカホニウツク クヤウテ サケノ ソタ
ホンノリトアカク

春風入髓散無声 咽暗氷
ハルカゼガ身ニシムヤウデカラダウチ コオリニムセブ
ヘヨトガヤハツテサムウナイ

詩 酒之詞 林和靖

温如春色爽如秋一盞樽前
ヌクトクエ ニヨウ サカ ヤウイ アキ イチサン ソンゼン

自斟酌酒ヲノメハカラダノアタヘル
ミヅカラ ケシ ヤウ ノメ ハカラ ダノ アタヘル
春ノヤウナリ気ノサハヤ

カナイハアキメウナニヨツテヒトツノサガキヨモツテタルノミヘデヒトリサイタリカヤヘタリ井ル・百万愁魔降不得故應・用爾作戈矛カズ〳〵ノムレヘラタイワザ〳〵酒ノカラ弟トレテカノ碧香臘ウルヘラオヒシリゾケルナリ・月能遮冷破暑還須百餓嘗碧香ナドニ云メイシユラノメバラ月ニモヨク寒キヲフセギ又シヨノレブン二八百パイモノンデアキ好比阿房無限勝・大寒ヨワスレル・大熱此中藏コノタノシミヲアウ宮ニクラベテミレハヨツホドーサツテアル有ハ大カモ本ンモコサメバトトワスレユヘヒヤ

酒樹

頻遂国ニ樹アリ石榴ニ似タリ其花ノ汁ヲ採テ瓶ノ中ニ停レハ数日ニシテ酒トナル味ハナハダ甘美ナリ

顧建康

顧憲之ト云人琴ヲ弾シテ甚人和ヲ得タリ故ニ人々味アツク旨キ酒ヲ顧建康ト号ク其清クシテ且美ナルヲ云

八月飲食並料理献立

禁物

生姜八九月食ヒ過クレバ悪シ

秋ナスハ八九月の部ふるを目と損ず○烏羊小児ニ宜シ

好物

兎肉今月より十月まで食ヘベシ他月ハ宜シカラズ

料理

汁

小豆ゆ

竹輪かまぼこ

たけのこ

方角

やうど

ふきのとう

はくさい

むかご

はらくま

むかごのこ

車えび

えんどう

小いも

ちち姫さう

青えんぶ

こーすい

ほうれん草

おろし大根

鴨

ちち姫さう

忠さうけ

こーすい

清汁

鴨

ちち姫さう

忠さうけ

こーすい

贈

さうり・あるべ

えん・ねぎ

ぜんぎ

きすご

のり・ねぎ

しほ仕立

仔鯛・ゆうがい

だえん・ぎーすい

ぐーすい・ぜーすい

ぐーが

ほどうれて

えすき・ふすーすげ

ぜんぎ

差味

煮物

和會物

吸物

精進汁

膾

清汁

差味

煮物

和會物

時物

魚

鳥